
遊戯王 g x 転生者の介入録

ボルケーノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王gx 転生者の介入録

【Nコード】

N8089W

【作者名】

ボルケーノ

【あらすじ】

神の仕業で死んでしまった主人公キタノカイツ如月魁史

神は、代わりに別の世界に転生させてやるといい主人公が選んだのは「遊戯王GX」の世界だった。

主人公は、積極的に原作に介入しどのような事になっていくのか？

第一話 転生そして新たな人生（前書き）

始まりました。更新は不定期ですがガンバて行きたいです

第一話 転生そして新たな人生

「ん、此処は何処だ・・・」

俺の名前は、如月魁史きんづき かいし大学が終わっていつも通りに行きつけのカフェドショップに行くはずだったんだかいつの間にか、辺りが真っ白な空間にいる。

腕を組んで、辺りを見わせていると向こうから白髪の爺さんがこっちに向かってきてスライディング土下座をしてきた

「どうも、すいませんでした！！！！！！！！！！」

「な、なんだ・・・あんたは？」

俺は、いきなりの事態に混乱しながらも土下座をしている爺さんに聞いた。

「私は、貴方の世界で言う神という者じゃ」

そして、爺さん・・・いや、一応神と言っておこう。神が、此処が何処か、なぜ俺が此処にいるかを説明してくれた。

「此処は天界の爺さんの空間で、爺さんが暇つぶしに紙飛行機を折っていて間違っつて俺の人生が書いてある紙を折り、他のゴミと一緒に捨てたということか？」

俺は、ひたすら土下座をしている神に聞き、神は額についた汗をつきながら

「う、うむ・・・ちゃんと分けてはいたんじやが、たまたま混じっていたようで気づいた時には焼却所で・・・」

神は、言い辛そうに答えた。

「はあくまあ、もう起きた事だから取り返さないけどさ。これから俺はどうなるんだ？死んだってことは、元の世界には戻れないんだろ？」

俺は、ため息を吐きながらも起きてしまった事を受け止め神に聞いた。

「そ、それについては、特例として違う世界に転生という処置が取られることになったんじや。わしに出来る事はなんでもするから、言っておくれ」

俺は、神のその言葉を聞き興奮しながら聞いた。

「違う世界って、漫画やゲームの世界でもいいのか!？」

「う、うむ。その程度なら訳はない、何処か行きたい世界にでもあるのかの？」

俺は、生前はゲームやアニメが大好きだったため実際に行ってみたいと何度を考えた事があった。

「そうだなあ・・・（ゲームの世界か、面白いかもしれないけど。やっぱり、言ってみたい世界は、『あの世界』だよな!!）」

俺は、色々と考えようやく転生先に選んだ世界は……

「決めたぞ、俺は遊戯王の世界に行ってみたい!!!」

そう、生前は何種類ものカードゲームをやっていたが、その中でも遊戯王は10年以上やってきたカードゲームだった、アニメも全シリーズ見たし目の前で自分が好きなモンスターが実体化するなんてここまで興奮する世界はない。

「遊戯王の世界か、うむ。大丈夫じゃよ、しかし、この世界は何種類かに分かれているが何処の行きたいのじゃ？」

神の、その言葉に俺の考えはすでに決まっていた。

「俺が、行きたい遊戯王の世界はGXの世界だ!!!」

そして、ここから俺の新たな人生が始まった。

第2話 V S クロノス 轟け、龍の息吹（前書き）

第二話投稿

第2話 VSクロノス 轟け、龍の息吹

「さて、此処が童実野町か。うはあゝマジで、アニメ通りだ、感激だ！！！」

神と話していた空間から、出た俺は童実野町の時計台の下に立っていた。

「此処が、初代遊戯王のバトルシティーが始まった場所か。まさか、俺が立つことが出来る何で夢にも思わなかったな。そういえば、俺、デッキは持っているのか？」

転生直前まで、鞆の中には多くのデッキが入っていたが神と話している時にはその鞆がなかった事に気が付き身に付いているものを確認してみると

「お、これって転生前から使っていた鞆だ。中身はつと・・・良かった 一軍や他のデッキも全部入ってるよ、後はこれは、デュエルアカデミアの受験票か？」

見てみると、番号は111番か確か、十代は110番だったかな？

俺は、辺りも見回してみると時計の時間に気がついた。

「やべ！！入学試験に遅れちゃう、此処まで来て入学できないなんて洒落にならない。」

俺は、走って海馬ドームに向った。

そして、ドーム内に入るとちょうど十代がクロノスの「古代の機械

巨人」に攻撃する所だった。

「ガツチャツ！楽しいデュエルだったぜ、先生！！」

「そんな、ワタ シがこんなドロップアウトボーイに負けるナンー
デ」

クロノスが、すごく落ち込んでいる。まあ、バカにしていた奴に負けるのはくやしけどあんなにかと、考えていると

「次、１１１番！デュエル場に！」

そして、俺の番になったので下に降りる最中に十代とすれ違い様に

「頑張れよ！！」

「おう！！ありがとよ！！」

俺は、気を引き締めてデュエル場に立った。

「では、試験を開始する。デュエ「チョット、待つので「ネ」ク、クロノス教諭どうしましたか？」

「その子の、相手はワタシゝがするのゝネ（あんな、負け方をしゝて、学園に帰ったゝらいい笑い者なのゝネ。この子には悪いですゝが名誉挽回させてもらうゝノ）」

そして、試験官とクロノスが交換した様子を見ていた魁吏は

「（絶対に、俺を名誉挽回の道具に使うつもりだろうなあゝなら、

逆にポロポロにしてやるぜ!!!」

魁吏は、明らかに悪い顔をしながらクロノスを見た。

「では、試験を始める〜ノ!!!」

「『デュエル!!!』」

クロノスLP4000

魁吏LP4000

「先攻は、譲るの〜ネ」

「なら、俺のターン。ドロー!!!」

俺は、引いたカードと手札を見て

「よし、これなら。俺は、フィールド魔法『龍の渓谷』を発動する!!!」

場 龍の渓谷

「このカードは、1ターンに1度手札を一枚捨てる事でデッキからレベル4以下のドラグニティと付いたモンスターを一枚手札に加えるか、ドラゴン族モンスターを一枚墓地に送るが出来る!!!俺は、ドラグニティ・ブラックスピアを墓地に送りデッキから、ドラグニティ・ファランクスを墓地に送る!!!そして、手札から霧の谷のフアルコンを攻撃表示で召喚してターンエンド!!!」

霧の谷のファルコン ATK2000

魁吏

モンスター 霧の谷のファルコン

「私のターン、ドロ。ワタ シは伏せカードを2枚セットして、魔法カード大嵐を発動スルー。そして、破壊されたカードは黄金の邪神像、このカードは破壊されたときに、邪神像トークンを特殊召喚する〜」

場 無し

クロノス

モンスター 邪神像トークン×2

「ち、やっぱり原作通りか。で、次に出てくるのは……」

「ワタ シは二体の邪神像トークンを生贄〜にいでよ、古代の機械巨人を召喚する〜」

クロノス

モンスター 古代の機械巨人 ATK3000

「そして、バトルフェイズ。古代の機械巨人で霧の谷のファルコンを攻撃!!」

魁吏 LP4000 3000

「ワタ シはさらに、一枚セットして、エンドなの〜ネ（念のため〜に聖なるバリア ミラーフォースを伏せておくの〜ネ）」

クロノス

モンスター 古代の機械巨人

伏せカード 一枚

「俺のターン！！ドロー！（まさか、ここまで原作通りとは思わなかったぜ。しかし、会場の奴らもうダメだって顔で俺の事見やがって、でもここからが俺の見せ場だぜ！！）」 俺は、手札から魔法カード手札抹殺を発動！！互いのプレイヤーは手札を全て捨て、捨てた枚数分ドローする。俺は、四枚ドロー！！」

「フン、何をする〜と思え〜ばただの、手札交換です〜か。所詮は、ドロップアウトボーイなのーネ」

クロノスは、鼻で笑っていたが

「それは、これから起きる事を見てからいいな！！俺は、ドラグニティ・アキュリスを召喚」

魁吏

モンスター ドラグニティ・アキュリス ATK1000

「このカード召喚された時ドラグニティと付いたモンスターを特殊召喚しこのカードを装備する。ドラグニティ・レギオンを特殊召喚！！そして、レギオンの効果発動、自分フィールドの魔法・罫ゾーンにあるドラグニティを墓地に送る事で相手フィールドに表側に存在するカードを破壊する、俺は古代の機械巨人を選択！！」

魁吏

ドラグニティ・レギオン（ドラグニティ・アキュリス装備）

レギオンから発射されたアキュリスがクロノスの古代の機械巨人を貫いた。

「アンマミーヤ、ワタ シの古代の機械巨人をがく?!?!?!?!?!」

しかし、クロノスの不幸はまだ続く

「そして、墓地に送られたアキュリスのモンスター効果発動!!このカードが装備状態で墓地に送られた時フィールドに存在するカードを一枚破壊する、俺は先生の伏せカードを破壊!!」

アキュリスが、クロノスの伏せカードを貫き破壊した。

「やはり、攻撃反応型の罠か。俺は、魔法カード二重召喚を発動!俺は、これでもう一度、通常召喚が出来る。俺は、もう一度ドラグニティ・レギオンを召喚、そして効果発動、このカードが召喚に成功した時墓地に存在するドラグニティを装備できる、俺は、墓地よりドラグニティ・ファランクスを装備する!そして、装備状態のファランクスの効果発動、装備されているこのカードを特殊召喚する事が出来る。チューナーモンスター ドラグニティ・ファランクスを特殊召喚!!」

「????????チューナー?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

会場から、声沸き上がった

「何なの〜ネ、チューナーとは?」

クロノスはクロノスで、始めてみるモンスターに混乱している。

「見ていれば分かるぜ、行くぜ！！俺は、レベル3のレギオン二体にレベル2のフアランクスをチューニング！！いざ、ドラゴンの咆哮を轟かせ墓地に眠りし同胞を力に変えよ！！シンクロ召喚 ドラグニティナイト・バルーチャー！！」

魁吏 ドラグニティナイト・バルーチャー ATK 2000

「シンクロ召喚とはなんなの〜ね???」

「シンクロ召喚とは、チューナーとチューナー以外のモンスターを素材に合計レベルと同じモンスターを融合デッキから特殊召喚する召喚方法だ！！」

「すげーな、あいつのモンスター！！闘ってみて〜」

「何か、すごいっす！！」

観客席で、十代や翔が騒いでいた。

「しかし、レベル8にしてはたったの2000しかないなんてたいしたことないの〜ね」

「俺は、まだバルーチャーの効果を使っていない！！効果発動、このカードが召喚に成功した時に自分の墓地に存在する「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスターを任意の数だけ選択し、装備力ード扱いとしてこのカードに装備することができる。このカードの攻撃力は、このカードに装備された「ドラグニティ」と名のついたカードの枚数×300ポイントアップする！！俺の墓地には五枚のド

ラグニティがいるので、全て装備する、よって攻撃力は・・・」

魁吏

モンスター ドラグニティナイト・バルーチヤ ATK2000
3500

魔法・罫

ドラグニティ・ファランクス×2、ドラグニティ・アキュリス、ドラグニティ・ブラックスピア、ドラグニティ・プランディストック、

「こ、攻撃力が・・・3500に。し、しかし攻撃されたとしても後500は残るのーネ」

クロノスは、ビビりながらも言った。

「それは、どうかな。」

魁吏は、笑いながら言った

「ど、どう言っことなのーネ!!」

「バルーチヤに装備されている、ドラグニティ・プランディストツクの効果は装備されているモンスターに二回の攻撃を与える能力を持っている、よってバルーチヤは3500の二回攻撃が可能!!バトルだ!!ドラグニティナイト・バルーチヤで先生に向かってダイレクトアタック!!」

バルーチヤから、放たれた咆哮がクロノスを襲った

クロノス LP4000 - 3000

「マンマミーヤ……！」

こうして、入学試験が終わった。

第2話 VS クロノス 轟け、龍の息吹（後書き）

「こんにちは、主人公の如月 魁吏です。」

「こんにちは、作者のホツシーです。」

「おい、とどめがバルーチヤってなんなんだ。あれは」

「あれは、実際にやられて事があるしやった事があったので、最初にはちよつどいいかな思ったんだよね」

「いや、他にも色々たとどめの指し方あっただろ。ドラクニティならトラドラとか」

「あれも、一応考えてはいたんですが・・・ありきたりなので没にしました。まあ、ドラグニティは以上にはあれは出しやすいんだけどね」

「はあ、まあいいか。で、次はどんな話なんだ？」

「原作通りに進む予定なので次は、自称エリートとのいざこざですかね。では、」

『ばいばい』

主人公設定（前書き）

今回は、主人公 如月魁吏についての書きます

主人公設定

名前 如月 魁吏

容姿

ドットハックGUのハセヲの髪を黒くし、後ろ髪を長くしたような感じになっている。

年齢

転生前 23歳 転生後 15歳

神のせいであって死んでしまっただけで、GXの世界へと転生した。デッキは複数持っており状況によってデッキを変える。普段はやさしいがキレるとかなり危険だ。

使用デッキ

1軍 ????

制裁デュエルで登場予定

2軍 獣デッキ（エクシーズ・シンクロ混合型）

主に「神獣王バルバロス」と「森の番人 グリーン・バブーン」の2体で殴るデッキだが場合によってはエクシーズやシンクロする。

3軍 レスキューラビットデッキ

名前通りレスキューラビットがメイン。エースモンスターは「銀河眼の光子竜」

4軍 ドラグニティデッキ

純正ドラグニティデッキだが「Sin スターダスト・ドラゴン」が入っており「トライデント・ドラギオン」を出しやすくなっている。

その他にも色々デッキを持っているが、主に使う2軍から4軍

主人公設定（後書き）

以上です。

第三話 入学そして接触（前書き）

今回はデュエルはなしです。

第三話 入学そして接触

、俺はデュエルアカデミアに向う船にいる。制服の色は赤、つまりレッド寮だ。クロノスに3500の二回攻撃で倒したのに、筆記テストでは十代よりも下だったらしい、しかし・・・

「ドラグニティーは、まだ完璧に使いこなせてないなあ〜まあ、クロノス相手に『あのデッキ』を使いたくなくなかつたし、仕方ないか。」

（作者は、小説を書くまでドラグニティーを使った事がなく実際に作成し現在練習中）

「しかし、バルーチヤが出るとは思わなかつた・・・レヴァティンが手札に来ていたら、トライデントの三回攻撃をしていたらうけど、勝てたからいいか。」

魁吏が、クロノスとの戦いを振り返っていると、後ろから

「なあ、お前シンクロっていうカードを使った奴だろ！？俺の名前は、遊城 十代っていうんだ、よろしくな！」

「僕は、丸藤翔っす。よろしく」

「俺は、三沢大地だ。よろしく。」

G Xの主要キャラ達が話しかけてきた。

「ああ、俺は如月魁吏。こちらこそ、よろしく」

魁吏は、十代達と握手し島に着くまで話をし、十代達と一緒にレイド寮の前まで来た。

「……………ここまでとは、思わなかった」

アニメで、ボロいのは知っているが此処までとは思わっていなかった。

「でも、なかなか良いんじゃないか？俺は、好きだぜ。」

十代は、生き生きと自分の部屋に向った。

「まあ、十代達は三人だけど俺は、一人らしいし良いかな？」

そして、魁吏も自分の部屋に向い、デッキの調節をしていると

ドンドン！とノック??する音がし、開けてみると

「よう、魁吏！さっそくだけでデュエルやろうぜ!!」

十代が部屋に遊びに来た、後ろを見ると苦笑している翔がいた。

「良いけど、何処でやるんだ？」

「学校内にデュエル場があるらしいから、そこでやろうぜ!!」

「分かった、少し待っていてくれデッキを持ってくるから（デュエル場か、となると万丈目との接触かな？）」

そして、十代達とデュエル場に行ったが原作通り、万丈目達と一悶

着があつた……が、なぜか。

「おい、貴様！！クロノス教諭を倒したからといい気になっているなよ！！！」

怒りの矛先が俺に向けられていた。さつきから、話しかけられても無視を決め込んだからだと思っけど、

「はあ〜（俺、最初の方の万丈目って嫌いなんだよなあ〜エリートぶって）」

「貴様、俺様を見てため息吐きやがって、上がれ、貴様をみじめに負かせてやる！！！」

万丈目は、デュエルディスクを腕に付け挑発してきた、そこに

「貴方達、何をしているの。」

入口から、GXのヒロイン天上院 明日香が現れた。良く見ると、後ろには原作には居なかつた青髪ロングの女の子がいた。容姿は、出る所は出ており引っ込む所は引っ込んでいてかなりの美人だ。（分かりやすく言うと、シャツフルのネリネの青髪と考えてください）

「天上院君に、天原君。この新入生にアカデミアの厳しさを教えてあげようとしていた所さ。」

万丈目が、魁吏達を指さしたが

「そ、そろそろ、歓迎会の時間なのでやめておいた方がいいと思います。」

天原という女の子がびくびくしながらも、万丈目に言った。

「ちっ、行くぞ！お前達！」

万丈目は取り巻きを連れて、デュエル場を出て行った後

「貴方達、彼の挑発に乗らない方がいいわよ。」

「そ、そうです。万丈目さんは怖いですし、デュエルの腕もかなり高いんです。」

魁吏と十代は、二人の言葉に

「デュエル（喧嘩）を売ってき買わないなんて、デュエリストじゃないぜ！」

「そうさ、それに強い奴と戦えるんだ。そっちの方がずっと楽しみだぜー！」

魁吏と十代は、拳をコツとぶつけて明日香達に言った。

「所で、あなたよね。入学試験でシンクロ召喚っていうのを使ったのは。」

明日香は、魁吏に聞いてきた。

「知っているということとは、見ていたのか？」

「私だけじゃないわよ。こっちの天原さんやさっきの万丈目君達も

見ていたもの」

「ふん（確かに、原作でもいたな。後、カイザーもいたかな？）」

「で、何か用なのか？」

「いえ、今後色々と楽しみが増えそうと思ってね。そっちの彼と同じように」

明日香は、十代の方を見て笑った。

「まあ、この学校にいるんだ。いずれは戦う事になるだろうからその時は、よろしく。俺は、如月魁吏」

「私の、名前は天上院明日香。こちらこそ、よろしく」

そして、魁吏はもう一人の女の子に近づき

「よろしくな。」

「は、はい。私の名前は、天原 美里。こちらこそ、よろしく願います……」

やはり、少しびくびくしている。

「大丈夫だよ。何もしないし、これから友達になるんだからびくびくするなよ。」

魁吏は笑いながら言いその言葉に、天原は顔を上げ魁吏の顔を見て

第三話 入学そして接触（後書き）

次回は、ついに万城目とのデュエルです。お楽しみ

第四話 VS万城目 壊れた機械の力(前書き)

では、万城目とのデュエルです。

第四話 VS万城目 壊れた機械の力

「よく来たな、ドロップアウトボーイ。逃げなかった事は褒めてやるのだが、来た事を後か「うるさい、わざわざ来てやったんだ。御託はいいから早くしな。」き、貴様！一度ならず二度までも俺を馬鹿にするとは叩きのめす！！」

魁吏の一言で、万丈目がキレ、デュエルが始まった。

「魁吏、頑張れよ！！」

「応援してるっすよ！！」

十代達が、少し離れた所から応援していると、

「やっぱり、こんな事になっていたわね。」

十代達が、後ろを見ると明日香と天原がいた。

「でも、明日香さん。デュエルは始まったばかりらしいですよ。」

十代が明日香達に近づき

「お前ら、何でこんな時間に此处にいるんだ？万丈目から何か来たのか？」

十代の質問に天原が答えた。

「い、いえ。あの万丈目さんが、大人しく引き下がるわけがないっ

て明日香さんが言うので見に来てみたら・・・まさか、本当にこんな事になっているなんて。」

天原が魁更の方を見ながら言うと

「まあ、始まったものは仕方ないから見てようぜ！今度は、どんなシンクロモンスターが出るか楽しみだぜ！！」

十代が興奮しながら言い、デュエルが始まった。

「行くぞ、万丈目！！」

「万丈目『さん』だ！！」

「『デュエル！！』」

魁更 LP4000

万丈目 LP4000

「先攻はいただく！ドロー！！」

万丈目は、自分の手札を確認し

「俺は、リボーン・ゾンビを召喚！さらに、伏せカードを2枚セットしターンエンド！！（俺が、伏せたのは通常・特殊召喚したモンスターを破壊し除外する『奈落の落とし穴』あいつのシンクロモンスターは特殊召喚だからな。した瞬間、除外してくれる！！）」

万丈目

モンスター

リボーン・ゾンビ

AKT1000

伏せカード

2枚

「俺のターン、ドロー!!!」

魁吏は、ドローしたカードと手札を見ると

「（えっ!!!この手札って）俺は、魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動!!!このカードは手札から、モンスターを捨てデッキからレベル1のモンスターを特殊召喚する。来い、レベルステイラ」

魁吏

モンスター レベルステイラ AKT600

「さらに、魔法カード愚かな埋葬を発動、デッキからモンスターを一枚墓地に送る。そして、魔法カードサイクロンを発動。万丈目、左のカードを破壊する!!!」

「ちっ!」

サイクロンは、『奈落の落とし穴』を破壊した。

「（奈落の落とし穴が破壊されたが、もう一枚は相手が攻撃してきたら攻撃表示モンスターをすべて破壊する『聖なるバリア』ミラーフォース!!!攻撃してきた瞬間にお前は、終わりだ!!!）」

「（やはり、原作と違っているか・・・となると、もう一枚は攻撃

反応型の罠かな？でも、今から、出すモンスターには意味なし！！）
俺は、チューナーモンスター、スクラップ・ビーストを攻撃表示で
召喚！！」

魁吏

モンスター

レベルステイラ AKT600

スクラップ・ビースト AKT1600

「来たか、チューナーモンスター！！」

魁吏が新たなチューナーモンスターを召喚を見て、十代達は

「お、来たぜ！チューナーモンスター、今度はどんな、シンクロモ
ンスターを見せてくれるのかな！？」

「でも、入学試験で使っていた『ドラグニティー』じゃないんすね。
今回はまるで」

翔のその言葉に明日香は

「ええ、チューナーモンスター、だからシンクロはするだろうけど・
・何かあのモンスターは機械っぽいモンスターね。」

「（あの、モンスター達で今度はいったいどんなモンスターが・・
）」

「俺は、最後に魔法カード死者蘇生を発動！！俺の場に甦れ、スク
ラップ・ゴーレム！！」

魁吏

モンスター

1レベルステイラ

4スクラップ・ビースト

5スクラップ・ゴーレム A K T 2 1 0 0

「俺は、レベル5のスクラップ・ゴーレムにレベル4のスクラップ・ビーストをチューニング！！今ここに、破棄された龍がその力を振るうために起動する！シンクロ召喚、スクラップ・ツイン・ドラゴン！！」

魁吏

モンスター

1レベルステイラ

9スクラップ・ツイン・ドラゴン A K T 3 0 0 0

魁吏の場に頭を二つある機械のような龍が召喚されたモンスターを見て十代達は

「うおおおお！！かっけ」

「何すか、あのモンスターは」

「あれが、彼の新たなシンクロモンスター……」

「（すごい、あんなモンスターを一ターンで召喚するなんて）」

万丈目は、スクラップ・ツイン・ドラゴンを見て、最初は驚いていたが

「（いくら、攻撃力が高かろうと破壊されてしまえばこっちの物だ！！）さあ、どうした！！攻撃してきてみる！！」

万丈目は、魁吏の事を挑発してきたが魁吏は落ち着いており

「（あの様子だと、やはりあの伏せカードは攻撃反応型か。しかし、今となつたら意味がないけれどな！！）俺は、スクラップ・ツイン・ドラゴンの効果発動！！このカードは1ターンに一度、俺の場のカードと相手のカードを二枚選択する、俺のカードは破壊され、相手の選択したカードは手札に戻る！！俺は、自分の場のレベルステイラとお前の場のリボーン・ゾンビともう一枚の伏せカード選択する！！」

「な、なんだと！！それじゃあ！！」

魁吏

モンスター スクラップ・ツイン・ドラゴン

万丈目

モンスター 0

伏せカード 0

「さらに、墓地に存在する二枚のレベルステイラの効果を発動、俺の場にいるレベル5以上のモンスターのレベルを1下げる事で特殊召喚できる！俺は、スクラップ・ツイン・ドラゴンのレベルを2下げ、特殊召喚！！」

魁吏

モンスター

スクラップ・ツイン・ドラゴン

レベルステイラ 二枚

「すげー、一気に三体並んだ!!」

十代と翔は、召喚されたモンスターに興奮し、明日香は魁史の無駄の無いプレイングを見て

「相手の場のカードを処理し、自分の場は強化・・・なんて人なのそこに、天原はある事に気がついた。

「あの、気づいたんですが、あのレベルステイラというモンスターって自分の場のレベル5以上のモンスターのレベルを1下げて特殊召喚するんですよね?」

「そうね、それがどうかしたの?」

明日香は、まだ気づいていなく十代と翔に関しては全く分かっていなかった

「つまり、あのスクラップ・ツイン・ドラゴンは効果で自分のカードも選択しないといけないんですが・・・あの、モンスターが墓地にあり限り何度でもつかえるのでは・・・」

天原の、その言葉を聞いて皆は、

「あっ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「さて、とどめと行きますか?レベルステイラ2体で万丈目を攻撃!」

万丈目 LP4000 2800

「ぐっ！き、貴様！」

「これで、とどめだ！！スクラップ・ツイン・ドラゴンの攻撃！！
ブラスト・ツイン・インパクト！」

万丈目 LP2800 0

「そんな、俺が、エリート俺がこんなドロップアウトボーイなん
ぞに負けるなんて・・・」

「これからは、人を馬鹿にするのはやめるんだな。万丈目。」

「まずいです、警備の人がこっちに向ってきます！」

天原のその言葉に俺達は

「マジで！！逃げるぞ、魁吏！」

「ああ！！！」

魁吏がデュエル場から降り、走りだしたら後ろから

「如月 魁吏！覚えておけ、俺に与えたこの屈辱は忘れんぞ！！！」

「で、どうだったかしら？ブルーの先例は。」

明日香は、腕を組みながら魁吏に聞いた

「大したことは無かったな。あんな満身野郎に負けるほどひ弱でもないしな、それに俺も本気を出していなかったし。」

その言葉を聞き明日香や十代達は驚いた。

「あのデッキは、本気じゃなかったの!？」

「ああ、あれはお気に入りの一つだけど一軍じゃないな。このデッキは、せいぜい五軍位のデッキかな。」

「な!! (あの力で五軍だなんて、その上は一体なんなの・・・)」

「さてと、俺は眠いから帰らせてもらうぜ。また明日な、行くぜ、十代に翔。」

「お、おい。待ってくれよ、魁吏。」

「ああ、僕を置いていかないで欲しいっす!!」

こうして、万丈目との戦いは終わった。

第四話 VS万城目 壊れた機械の力（後書き）

「おい、作者・・・」

な、なんだ、魁吏

「また、ワンキルて言うのはどういう事だ。」

え〜と、すみませんでした〜どうしても、ライフが4000だとワンキルになってしまいやすく二回連続でワンキルという事になってしまいました。

「すみませんでしたじゃね〜よ。少しは、内容を濃くしろよ！この駄作者！！」

次回こそは、しっかりとしたデュエル後景を書きたいと思えます。お楽しみにしてください。

「全く、ちゃんとしろよな。」

第五話 VS天原 侍対獣(前書き)

すみません。一つ投稿し忘れてました・・・

翔のぞき事件編です。

第五話 VS 天原 侍対獣

あれから、数日が経ったが…なぜか翔の奴が異常に気持ち悪かった…

「おい、十代。翔の奴どうかしたのか？ 体育が終わった辺りから、変に笑って気味が悪いんだが」

「さあ、知らないな、聞いてみた方が早いかな。」

そして、魁吏と十代は翔に近づくと、

「うふふふ。あ、魁吏君にアニキ～いや～春って良いっすね～アニキ達にも早く、春が来ると良いすね～」

と、やはり気味が悪い笑顔で笑っていた……………

「これは、入れて…こっちはどうするかな？」

その夜、魁吏がデッキ調整していると ドンドン！！

「魁吏、大変だ！ 翔が誘拐された！」 十代が、魁吏の部屋に飛び込んできた

「何があった…」

魁吏は、突然の事で余り頭が回らなかったが喋ることが出来た

「さっき、俺のPDAに変なメールが来て、翔を預かった。返して

ほしければ、女子寮まで来いって来たんだ!」

「(ああ、今日はこのイベントの日だったな。めんどくさいが行ってくるとするか・・・)しゃあない、行くか十代。」

「おう、翔を早く助けに行こうぜ!」

十代が、ドアをから飛び出していったがすぐに戻ってきた

「そういえば、俺、女子寮が何処にあるか知らなかったけ」

「確認してから、飛んで行けよ!!!!!!」

そうして、魁吏の案内で女子寮まで行き、そこで待っていたのは、原作通りに明日香、ともえ、ジュンコがいて、翔を簞巻きにしていた。それとなぜか天原も一緒に立っていた

「翔、お前何をやったんだ。今なら、罪は軽いぞ?」

魁吏は、翔を見る途端真剣なまなざしで言ったら

「違うツす。僕は、何もやっていないツす!!」

翔は、涙目になりながら魁吏に言うが、

「何よ、覗きのくせにしらばっくれるつもりなの!!」

ももえが、翔の方を向き言いその言葉を聞いた魁吏は少しだけ引いたら

「ああ、魁吏君引かないでほしいっす！！僕は、手紙に此処に来てほしいって書いたっす。」

「手紙？」

魁吏は、翔のポケットから手紙を取り出ししてみたが……

「おい、翔。これ、字が汚すぎるだろ……なんで、こんなので来る気になったかな。」

「そうよ、私の字はこんなに汚くはないわ。」

明日香も、手紙の字を見て少しだけ怒っている

「なあ、なら事件は解決つてことで翔は連れ帰ってもいいだろ？」

十代は、明日香達に近寄り言うが

「ここまで来て、ただで帰るなんてもつたいなくない？十代、魁吏、貴方達どちらでもいいからデュエルしない？」

「お、面白いじゃん！！魁吏、俺に行かせてくれよ、頼む！！」

「まあ、いいか。じゃあ、俺はけんが「魁吏さん、だったら私とデュエルしませんか？」え？」

美里が、おどおどしながら言った

「あら、めずらしい。美里が自分からデュエルを申し込むなんて、しかも男子に。」

美里は、性格上自分から申し込みなどはしないほらいいが

「だ、だめでしょうか？」

目をうるうるしながら見つめられたので

「い、いいぜ、やろうか。(こ、こんな見つめられて、断れるか・・
」

そして、明日香とのデュエルは原作通りにサンダー・ジャイアント
で止めをさし俺達の番となった。

「さて、じゃあ。俺達もさっさと始めるか？」

「は、はい。少しだけ待ってください。」

そうすると、手首に巻いてあったひもを解き長い髪をまとめ始めた。

「魁吏、少しびっくりするかもしれないけど頑張りなさいよ。」

後ろにいた明日香が不意にこんな事を魁吏に言った

「それって、どういうこと」では、魁吏殿！尋常に勝負を開始いたしまし
しょう！」「な、何・・」

美里が、髪をまとめたら今までのおどおどとした態度から凜々しい
という言葉が合う感じになっていた。

「え、明日香さん、出来れば説明をしていただけなんですけど・・

「美里はね、デュエルとなると髪をまとめる癖があるみたいで・・・髪をまとめると、まさに武士という言葉が合う風になってしまうの。彼女のデッキがそうだからかもしれないけど」

「魁吏殿、お話もその辺で終わりにして勝負デュエルです!!」

「お、おう。では、あらためて!!」

「「デュエル!!!」」

魁吏LP4000

天原LP4000

「行きます、魁吏殿!私のターン、ドロ―!」

「私は、六武衆キザンを攻撃表示で召喚!さらに、二枚伏せてターンエンド!」

天原場

モンスター六武衆キザン AKT1800

伏せカード二枚

手札3枚

天原のモンスターを見た十代達は

「へえ〜六武衆デッキか、おもしろいデッキだな。」

「そうね、でも場の支配力はかなり高いデッキよ。」

「六武衆は展開中はすさまじいすから」

「俺のターン！ドロー！（六武衆か、並べると厄介だからな。）
俺は、おとぼけオポッサムを召喚」

魁吏 場

モンスターおとぼけオポッサム A K T 6 0 0

「攻撃力600を攻撃表示で召喚？何を、考えているの」

「見てればわかるさ。俺は、さらにおとぼけオポッサムの効果を発動。このカードの召喚時、相手の場にこのカードよりも攻撃力が高いモンスターが存在する場合、このカードは破壊される。天原の場には攻撃力1800のキザンがいるため、おとぼけオポッサムを破壊する！！」

魁吏 場

モンスター 0

「じ、自分のモンスターを破壊した！？どうして・・・」

「その瞬間、手札からモンスター効果発動！！このカードは、自分の獣族モンスターが破壊される事でライフを1000支払う事で手札又は墓地から特殊召喚する事が出来る、来い、我がデッキの番人！！森の番人 グリーン・バブーン！！」

魁吏

LP4000 3000

場

モンスター 森の番人グリーン・バブーン AKT 2600

「すげー1ターン目から攻撃力2600の上級モンスターを召喚したぜ!!」

「彼、さすがね。2体のモンスター効果をうまく組み合わせているわ。全く、無駄がないわ・・・(彼、シンクロ召喚だけじゃなくモンスターの相性も理解している。)」

「1ターン目から上級モンスターとはやりませぬ、魁吏殿。(しかし、私の伏せカードの一枚は収縮。攻撃してきたか返り討ちです。)」

「俺は、永続魔法、強者の苦痛を2枚発動する。この魔法カードは相手モンスターのレベルかける100下がる。よってザンジの攻撃力は」

六武衆ザンジ AKT1800 1400 1000

「そ、そんな・・・(これでは、半減させても迎撃出来ない)」

「それでは、バトルフェイズ!!グリーンバブーンで六武衆キザンを攻撃、怒りの鉄槌!!」

天原LP4000 2400

「俺は、さらに伏せカードを1枚セットし、ターンエンド!!」

魁吏 場

モンスター 森の番人 グリーンバブーン A K T 2 6 0 0

伏せカード一枚 強者の苦痛二枚

手札1枚

「私のターン、ドロー!! 私は、魔法カード二重召喚発動。このカードの効果でこのターン二度通常召喚できる、私は六武衆カモンとイロウを召喚!!」

天原 場

モンスター 六武衆 カモン A K T 1 5 0 0 9 0 0

六武衆 イロウ A K T 1 7 0 0 9 0 0

「私は、カモンの効果発動、フィールドのある表側の魔法又は罫を1枚破壊できる。私は、強者の苦痛を1枚破壊し、これによって攻撃力が」

六武衆 カモン A K T 9 0 0 1 2 0 0

六武衆 イロウ A K T 9 0 0 1 3 0 0

「攻撃力は、少しだけ元に戻ったか・・・(このデッキには召喚反応系の罫が入っていないから召喚時何もできないか・・・)」

「私は、このままバトルフェイズに移行しイロウで森の番人グリーンバブーンを攻撃!!」

「くっ、イロウで攻撃という事は手札に・・・」

「ええ、その通りです。だから、速効魔法 月の書を発動しグリーン・バブーンを裏向きにします。そして、裏向きになったグリーン・バブーンをイロウで攻撃！沈黙の剣！！」

イロウがセット状態のグリーンバブーンを刀で突き刺し破壊した

「カモンは効果を使ったターンは攻撃はできません。ターンエントです」

天原 場

モンスター 六武衆イロウ AKT1300

六武衆カモン AKT1200

伏せカード2枚

手札0

「俺のターン、ドロー！俺は、手札からおとぼけオポッサムを召還し、効果で破壊。LPを1000支払い、もう一度グリーン・バブーンを墓地から復活させる。」

魁吏

LP3000 2000

場

モンスター グリーン・バブーン AKT2600

「そして、グリーン・バブーンで六武衆カモンを攻撃！怒りのコンバット！」

「私は、伏せカードをオープン！攻撃の無力化。攻撃を無効にして、

バトルフェイズを終了させる。」

「ちー（しかし、これで下準備は完成だ、後はあのカードを引ければ）」

魁吏は、頭の中で計算し

「俺は、魔法カードの光の護封剣を発動しターンエンド！」

魁吏場

モンスター 森の番人グリーンバブーン AKT2600

光の護封剣（1ターン目）強者の苦痛

「私のターン、ドロー！」

「カモンの効果を発動します！！攻撃を放棄することで相手の表示のされている魔法、罫を破壊することが出来る。私は、カモンの効果で魁吏殿の強者の苦痛を破壊する！」

カモンは手に持っていた爆弾を投げ、強者の苦痛を破壊した。

「でも、今グリーン・バブーンを倒す手段が無いから、イロウとカモンを守備にして伏せカード1枚セットしてターンエンド」

天原場 六武衆イロウAKT1400

六武衆カモンAKT1200

伏せカード2枚

手札0

「俺のターン、ドロー！（来た！！！！俺の切り札）俺は、魔法カード、大寒波を発動！このカードは次の自分のターンまで魔法、罠をプレイする事が出来ない魔法カードだ、俺は、さらに墓地からおとぼけオポッサムの効果を発動しフィールドに2体蘇生させる」

魁吏 場

モンスター おとぼけオポッサム×2 AKT600
グリーン・バブーン AKT2600

「い、一気に三体もモンスターが！」

離れていた十代達も

「すげー一気に場を固めやがった。」

「でも、おとぼけオポッサムじゃあ、六武衆達には勝てないっすよ？」

「彼も、それは重々承知のつもりでしょ…しかも、大寒波で魔法罠を封印した事も気になるわ（しかし、どうするつもりなのかしら？）」

「見せてやるぜ、このデッキの真のエースモンスターにしてマイフイイバリットカードをな！」

「グリーン・バブーンが切り札じゃ無いの！？」

「コイツは、双角の一つだよ。俺は、おとぼけオポッサム2体とグリーン・バブーンをリリースする！」

「グリーン・バブーンを生贄！そこまでして出すモンスターって！？」

魁吏は笑みを浮かべながら叫んだ。

「出でよ、神の名を持つ聖なる獣！神獣王バルバロス降臨せよ！！！！」

魁吏 場

モンスター 神獣王バルバロスAKT3000

「し、神獣王バルバロス！獣戦士族の中でも最高級のレアカード……」

「美里、油断しないで！バルバロスの効果はこれからよ！」

呆然とする天原に明日香は言い、

「明日香の言う通りだ！獣王バルバロスの効果発動、このカードを三体リリースで召喚した場合、相手フィールドを全て破壊する！」

「なっ！？私のフィールド全体を破壊効果！なら、リバーズカードオープン」

「無駄だ、大寒波によって魔法、罫は使用不可だ！」

明日香は魁吏のその言葉を聞き

「そういうことだったのね！」

十代はまだ意味が分かっていないらしく明日香に聞いた

「明日香、どいう意味だよ。」

「神獣王バルバロスは確かに強力モンスターだけどチェーンで奈落の落とし穴や天罰で破壊される可能性もあるわ。しかし、彼は大寒波によって魔法、罫を使用不可にしてバルバロスの効果を100%使ったのよ……」

「正解だぜ、明日香！バルバロスを確実に効果を使い、場に残すにはこうするのが一番なんでね。さてと、バトルフェイズだ！神獣王バルバロスの攻撃！スパイラルセイバー！」

天原LP2600 - 400

「じゃあ、翔はかえしてもらうぜ。」

「ええ、こつちも色々勉強になったわ。特に魁吏にはね。」

明日香が魁吏を見ながら言い、天原が魁吏に近づいてきた。

「どうした、天原？」

「あ、あの……で、できれば今度からは名前でも呼んでくれませんか？あそこまで、本気になったのは久々でしたし、呼んでほしいので……」

だめですが？」

天原が、ウルウルした眼で魁吏の事を見て

「（だから、こんな目で見られたら断れなつての！！）わ、分かった、美里。」

「は、はい！！魁吏さん」

「さ、さて。用事も済んだ事だしさつさと帰って寝るか！！」

「お、おい。待てよ、魁吏」

「待つてくださいつすゝアニキゝ魁吏君」

魁吏達が言った後

「美里、貴方から男子に名前と呼んでほしいなんて珍しいではありませんか？」

「そうですね、美里さん。どうしてですか？」

モモヨとジュンコがニヤニヤしながら美里に迫っていくと

「／／／／／／／／／／／／ あ、明日も早いですし、早く寝ましょう！！お休みなさい！！！！」

美里は、寮に向かって走っていった

「ふふふふ。（それにしても、如月魁吏。思った以上に面白いわね。・
・今度は、私がデュエルしたいわね）」

ポートの上では

「ニヤニヤ」

2人が、魁吏の方も見てニヤニヤしていたので

「お前ら、早く帰るんだから漕げよ!!」

「まあ、良いじゃんか。」

「そつすよ。僕と違って、春が近づいてきてるんっすから」

翔のニヤケ顔が以上にムカついたのか魁吏は

「おい、翔、十代・・・人ってどのくらいの重さで沈むのかな・・・」

「さっさと帰って寝るッす。明日も学校っす。」

魁吏から、オールの奪って凄まじい早さで漕ぐ翔であった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・魁吏、ボソっとは怖いぜ・・・・・・・・」

第五話 VS天原 侍対獣（後書き）

「おい。」

……………（眼を合わそうとしない）

「おい!!！」

な、なにか……………

「投稿し忘れるってなんだあ!!!!しかも、今回のデュエルで使ったデツキは元お前の一軍だろうが!!！」

ご、ごめんなさい!!読者のみなさんと我が獣デツキに対して本当にすみませんでした!!

「今度は、気を付けよな。」

はい（涙）

第六話 昇格試験 前篇（前書き）

再投稿です

第六話 昇格試験 前篇

あれから、数日がたち進級試験の日が近づいてきた…

え、試験はどうなんだって？いや〜大丈夫じゃね、まあ勉強はしておくけどね

翔は原作通りに死者蘇生に祈っている、なんだろ。アレを見ているとカードを地獄からの呼び声やら降格処分やら反対のカードに変えたいと思ってしまうのは…
思ってしまったんなら仕方ないよね

翔にバレないように、三枚の死者蘇生を地獄からの呼び声・降格処分・地獄からの呼び声と言う順に置き換えて置いた。

その夜に、隣からなにやら叫び声が聞こえたような気がしたが気のせいだな。

「ふあ〜少しばかり頑張りすぎたかな？」

目を擦りながら、外に出てみると翔からドヨンという効果音が合いそうな雰囲気を出していた。

一緒に歩いていた十代が魁吏に気づき走ってきた

「おふあよ〜十代。」

「ああ、おはようじゃなくて！魁吏、あれどうするんだよ！」

十代が翔の方を指を指しながら言った。

「ん〜なんかあったのか？」

「お前が、昨日死者蘇生を地獄からの呼び声やら降格処分に置き換えたの知らずに祈り続けて、ようやく気づいたと思ったら変な奇声を上げて口からなんか出てきたんだ！」

「あ〜、昨日の奇声は気のせいじゃなかったのか。良かった、良かった。変な電波を受信出来るようになったのかと心配だったんだが。」

魁吏が胸をなで下ろすと

「おい、そういう問題じゃないだろ！」

十代と魁吏の会話によろやく翔も気づき、まるでゾンビのようにつちに向かってきた

「か〜い〜り〜くん。君っすか？死者蘇生を地獄からの呼び声と降格処分に置き換えたのは…。」

「ああ、それでか」

「それがじゃないっすー！ひどいじゃないっすか、よりによって地獄からの呼び声にするなんて」

魁吏に掴みかかるように言ってくる翔に対して魁吏は

「馬鹿野郎、自分のデッキを信じずに使者蘇生だのみしているお前が悪い。そんな事をしているんだったらデッキを見直して改良でもしてろ。」

魁吏に痛い所を突っ込まれ翔は蹲って地面にのの字を書き始めてしまった。

「だって、しかたないじゃないっか・・・カードも枚数持っていないからデッキも改良出来なかったし」

「はあくなら、今度からは俺の所に来い。色々カードは余っているからデッキを改良手伝ってやるから」

魁吏は額を手で押さえながら翔に言った

「ホントすか！なら、お願いしたいっすー!!」

「お、面白そうだな、俺もその時は混ぜてくれよ!!」

このような感じで、テストを受けた。

「はあく筆記テスト、本当にめんどかった・・・まあ、全部問題は埋められたからいいかな」

魁吏が机に伏せていると

「あら、どうしたの？もしかして、テストうまくいかなったのから？」

「そ、そうなんですか、魁吏さん。」

「ちげ〜よ。疲れたただだよ。明日香、美里」

そう、話しかけてきたのは明日香と美里だった。

「そう、所で貴方は、カードを買いにいかないのかしら？十代や翔君は買いにいたんでしょ？」

「俺には必要ないな。それに急にカードを追加してバランス崩しても大変だしな。」

明日香達とご飯を食べ、午後の実施試験へ向かった

そして、試験が始まり、十代は万丈目に勝ち他の皆も

「ドリルロイドで止めっす！！」

「行け、ウォータードラゴン！！！」

「代將軍 紫炎を筆頭に皆で止め！！！」

翔も、前日にデッキを見て調整してあげたおかげか、らくらく勝っていた（相手は、同じオシリスレッドだけれども・・・）

「しかし、美里のあれを見るとただのいじめに見えてくるのは俺だけかなあ〜」

「仕方ないわよ、あれの爆発力が六武衆なんだから。」

後ろを振り返ると、明日香とえ〜と・・・あ、モモヨとジュンコ

がいた

「ちょっと!!!今、私達の名前忘れていなかった!!!」

「明らかに、反応が遅かったですわよ!!!」

「ははははは、所で明日香?お前、まだ試験やっていたよな?」

「ふふ、ええそうよ。何時になったら始まるのかしら。」

最初の笑いに少しだけ不安が過った、こうしていると階段から試験を終えたばかりの美里と十代達が上がってきた。

「おつかれさま、皆。どうだった、試験は?」

魁吏が聞くと

「いや〜トメさんからパツクを貰っていなかったら負けてだぜ〜あ〜良かった」

「こつちも、問題はない。むしろ、本気が出せなかったがな。」

「魁吏君が、昨日デッキを弄ってくれたおかげで回りが良かったす!!!ありがとう!!!」

「わ、私も大丈夫でした・・・魁吏さん達はまだなんですか?」

美里が、魁吏と明日香を見て言った

「ああ、全く。早く、終わって欲しいもんだぜ。」

魁吏がため息をはくと

「そう、長くは待たないと思うわよ。ほとんどの生徒が試験を終えているからそろそろでしょう。」

明日香は相変わらず笑って言い、そこに

『オシリスレッド 如月魁吏君。オシリスレッド 如月魁吏君。まもなく試験を開始します。特定の位置で用意してください』

「お、ようやくか。さてと、じゃあ油断せずにがんばってくるかな。」

「おう、頑張つてこいよ、魁吏!!」

「頑張るっすよ!!」

「君なら、そう簡単に負けはないと思うが頑張れ。」

十代、翔、三沢の順に声を掛けてくれて

「あ、あの・・・頑張ってくださいね!!」

顔も、真っ赤にしながらも魁吏を応援した美里に

「おう、ありがとな、頑張ってくるよ!!」

そして、デュエル場に着いた方がいいが

「おい。なんで、相手がお前なんだ？明日香・・・」

そう、魁吏の対戦相手は魁吏の後に呼ばれた明日香だった。

「あら、知らないの？オベリスクブルーにはね、相手も選択する事が出来て許可が通れば試験を受ける事が出来るのよ。」

明日香は、悪戯を成功した子供のように笑っていた

「さつきから、ひたすら笑っていたのはこれだったのか・・・しかたね、迷っていたって仕方がない！さあ、やるか、明日香！」

「ちょっと待って、ただデュエルするだけじゃあ面白くないから少し賭けをしないかしら」

あの、優等生の明日香からは信じられないような言葉が出てきたが

「賭けだあゝ一体何を賭けるって言うんだ。」

魁吏は、明日香を真つすぐ見て言い、おもむろに明日香は言った

「もし、このデュエルで私が勝つたらシンクロモンしたーとそれに必要なチューナーを少し分けてくれないから」

魁吏は、その言葉を聞き仰天した

「明日香、お前分かって言っているんだよな。それを条件に出すっていう事はそれなりに対価を払う覚悟があるんだな？」

「それでも、モモヨ達も巻き込むのは「いいです!!明日香様」ジ
ュンコ!?!」

「明日香さん、私達は明日香さんと一緒なら何も怖くありませんし、
必ず勝つてくれると信じています!!」

「モモヨ、分かったわ。ありがとね、二人とも。それと、ごめんな
さいね、美里。こんな事に巻き込んでしまって」

「い、いいえ。大丈夫です。それよりも、恥ずかしいのは苦手なの
で勝ってくださいね(魁吏さんなら、見てもらってもいいけどノノ
ノノノノ)」

「さて、そろそろ良いかな?明日香。」

「ええ、貴方の力、存分に見せてもらうわ・・・そして、約束通り
シンクロモンスターをいただくわよ!!」

「へっ、明日が楽しみだぜ!!」

『デュエル!!!!!!!!』

第七話 昇格試験 後篇(前書き)

さて、後篇です。明日香とのデュエルはどのようになるでしょうか？

第七話 昇格試験 後篇

『デュエル!!』

魁吏 LP4000

明日香 LP4000

「私のターン、ドロー！ 私は、サイバーチュチュを攻撃表示で召喚し、カードを2枚セットしターンエンド!!」

明日香 場

サイバーチュチュ AKT1000

伏せ 2枚

手札 3枚

「俺のターン、ドロー！」

「魁吏、見せてもらいましょうか。貴方のシンクロ召喚をこの実戦で!!」

その言葉を聞いた魁吏は少し言葉を濁らせた

「え〜と。悪い、明日香……」

「へっ」

「今日は、シンクロは使わないんだというかこのデッキにチューナ

攻撃表示で召喚！」

魁吏 場

レスキューラビット A K T 3 0 0

「シンクロを使わないのにそんな、攻撃力の低いモンスターで何を
するつもり？」

明日香は、魁吏が召喚したモンスターをみて言った

「それはな・・・こうするのさ！レスキューラビットの効果、この
カードを除外する事でデッキから同名通常モンスターを2体特殊召
喚する！来い、マンモスの墓場を特殊召喚！」

魁吏 場

マンモスの墓場 A K T 1 2 0 0 x 2

「な、魁吏。貴方は私を馬鹿にしているの！！モンスター効果を使
つてまで召喚したのがたかが攻撃力が1200しかないマンモスの
墓場なんて、バカにするのも体外にしなさい！！」

明日香は、魁吏が召喚したマンモスの墓場をみて明らかに怒ってい
る。

「いや、明日香。俺は、バカに何かしてないぜ」

「なら、なんでこんなモンスターを召喚したのよ！」

「それはな、こうするからさ！！俺は、レベル3のマンモスの墓場
2体をオーバレイ！！！」

と明日香の眼はさつきまでとは違いまるで、子どもが新しいおもちゃを買ってもらったような目でキラキラと輝いていた

「面白いわ。確かに、シンクロ召喚と同じ位にいえ、私はまだシンクロモンスターとは戦っていないからそれ以上にワクワクするわ。」

「喜んでもらってうれしいが、これはデュエル中なんですね。続いて蟻岩土ブリリアントの効果発動、オーバーレイユニットを一つ使い自分フィールドにモンスター全て攻撃力を300上げる事が出来る、これによりブリリアントの攻撃力は2100に上昇する。バトルフェイズに移行し蟻岩土ブリリアントで攻撃、クラッシュブレイク！」

「させないわ。伏せカードオープン、和睦の使者！これにより、私のモンスターは破壊されずダメージも0になる。」

「なら、3枚カードをセットしターンエンド。」

魁吏 場

蟻岩土 ブリリアント A K T 1 8 0 0

伏せカード 3枚

手札 2枚

「私のターン、ドロ！。私は、融合を発動させ手札のエトワールサイバーとブレイド・スケイターを融合しサイバーブレイダーを融合召喚するわ。」

明日香 場

サイバーブレイダー A K T 2 1 0 0

「さっそく出てきたか。めんどくさいモンスターだな。」

「めんどくさいとは随分な言い方ね。まあ、いいわ、バトルフェイズに入るわ。サイバーブレイダーで蟻岩土ブリリアントを攻撃！」

「く、お互いのモンスターは2,100が・・・」

「その様子だと、知っているようね。サイバーブレイダーの第一に効果相手の場にいるモンスターが1体のみの場合、このカードは戦闘では破壊されない。よって、蟻岩土ブリリアントを破壊するわ。」

「ちっ（くそ、このカードはOCG版だからアニメ版のような効果は持っていない。）」

「残念だったわね、せっかく出したエクシーズモンスターだったのに破壊されてしまって。続いて、サイバーチュチュでダイレクトアタック！」

魁吏 LP4000 3000

魁吏は、明日香を見ながら

「ああ、まさかこんなに早くこいつを破壊されるとは思っていなかったよ。さすがは、オベリスクブルー女子筆頭だけはあるな。」

「あら、こんなことでもう諦めてしまったのかしら？」

「なめるなよ。勝負はここからだ。」

「そう、良かったわ。こんな事であきらめてしまったら面白くない

もの。私は、これでターンエンドよ。」

明日香 場

サイバーブレイダー AKT2100 (戦闘破壊不可)

伏せ 一枚

「おっと、エンドフェイス時にリバースカードオープン サイクロ
ン！お前のリバースを破壊させてもらうぜ。」

破壊されたのは、ホーリライフバリアだった。

「そして、俺のターンドロー！（来た、このデッキのエースモンス
ター！）俺は、魔法カードD・D・Rを発動する、手札から一枚手
札を捨て除外されているモンスターに装備する。俺は、レスキュー
ラビットを特殊召喚」

魁吏 場

レスキューラビット AKT300

伏せ 2枚

「あら、今度はどんなエクシースモンスターを召喚してくれるのか
しら？」

明日香は、レスキューラビットを見ながら笑ったが魁吏は

「明日香、これから出すモンスターはこのデッキのエースであり最
強の相棒だ。その目に焼き付ける！俺は、レスキューラビットの効
果でデッキからジエネティック・ワーウルフを二体特殊召喚！」

魁吏 場

ジエネティック・ワーウルフ AKT2000 x2

「（レベル4を二体・・・ランク4のエクシーズモンスターかしらけど！）相手の場にいるモンスターが2体の場合このサイバーブレイダーの攻撃力は2倍となるよって、攻撃力は4200さあ、どうする魁吏！」

「行くぜ、俺は二体のジエネティック・ワーウルフを生贄に現れる銀河から生まれた光の龍、銀河眼の光子竜 ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン！！！」

魁吏 場

銀河眼の光子竜 AKT3000

「綺麗。何、そのドラゴンは・・・」

明日香は、いや会場中が魁吏が召喚した竜に見とれた

「綺麗・・・」

「うつくしい」

「あの眼に引き込まれそうだ・・・」

会場の皆は思い思い口にした

「この竜は眼に銀河を宿し神聖なる竜、その力はデュエルキング武藤遊戯のライバル海馬瀬戸が持つ青い眼の白竜を超える。」

「な、あの青い眼の白竜を超える力ですって！？」

「まあ、そのかわりにこのモンスターは通常召喚が出来ず、攻撃力2000以上のモンスターをリリースしないと出せないがな。さらに、リバース発動！リビングデットの呼び声、甦れマンモスの墓場を蘇生し、使者蘇生を発動もう一体のマンモスの墓場を復活させる
！！」

魁吏 場

銀河眼の光子龍 AKT3000

マンモスの墓場 AKT1200 ×2

リビングデットの呼び声

伏せ 1枚

「また、エクシーズ召喚！？」

「行くぜ、マンモスの墓場二体をオーバーレイ、2体のモンスターでオーバーレイネットワークと構築！エクシーズ召喚、現れる！！
？17 リバース・ドラゴン！」

魁吏 場

銀河眼の光子龍 AKT3000

リバース・ドラゴン AKT2000

リビングデットの呼び声

伏せ 1枚

今度は、魁吏の場に青い龍が特殊召喚された。

「また、？なの！？ 何枚あるのよ、？って！」

・・・99枚あるらしいけど、言わない方がいいな。見せるって
言われたら困るし

魁吏 場

銀河眼の光子龍 AKT3000

リバイス・ドラゴン AKT2000

リビングゲットの呼び声

伏せ 1枚

「攻撃力3000と2000のモンスターを2体・・・しかも、一
ターンの間でこんな」

「俺はリバイス・ドラゴンの効果を発動する。このカードはオーバ
ーレイユニットを一つ使う事で攻撃力を500上げる事が出来る。
よって攻撃力は2500だ！そして、俺は通常召喚を行っていない
！！俺は、手札からセイバーザウルスを召喚する。これによって、
俺の場合はモンスターが3体よってサイバーブレイダーの効果は変わ
る。」

銀河眼の光子龍 AKT3000

リバイス・ドラゴン AKT2000

セイバーザウルス AKT1900

リビングゲットの呼び声

伏せ 1枚

「サイバーブレイダーの第三の効果は相手の場にいるモンスターが
3体の場合相手の魔法・罫・モンスター効果を無効にするけど」

「ああ、此処までいたら問題はないな。さてと、バトルフェイスに入るぜ！！やれ、銀河眼の光子龍の攻撃、破滅のフォトン・ストリーム！！！」

銀河眼の光子龍の放ったプレスがサイバーブレイダーを破壊した

明日香 LP4000 3100

「くっ、サイバーブレイダーが」

「まだまだ！セイバーザウルスでサイバークチュチュを攻撃」

「きゃあああああああ！！！！！」

破壊の衝撃が明日香を襲った。

明日香 LP3100 2200

「止めだ！リバイス・ドラゴンの攻撃、くらえ、バイス・ストリーム！！！」

「きゃあああああああ！！！！！！！！！」

明日香 LP2200 300

『勝者 如月魁吏！！』

「よし、俺の勝ちだな。明日香」

魁吏は、明日香に手を伸ばし立たせる

「ええ、私の負けよ。まさか、シンクロじゃなくエクシーズ召喚なんて違った召喚方法を使うなんて驚いたわ。」

「で、どうだった？シンクロと同じくらい面白かったか？」

「ええ、とてもね。でも、今度はシンクロと戦ってみたいわね。」

「ああ、その時を楽しみにしているよ。」

『おめでとう、如月 魁吏君。そして遊城 十代君。君たちは格上であるオベリスクブルーに果敢に挑み勝ち、如月君の場合はまた違った召喚方法で勝利した。君達をライイエローに昇格しよう。』

その後、十代は原作通りオシリスレッドに残り、魁吏は素直に昇格を受け取りライイエローに上がった。

おまけ

「おい、所で約束は忘れていないだろうな？」

「「「「ギック……!!」「「「「」

「明日は、約束通り超ミニチャイナだから」

「「「「い、いや……!!……!!……!!……!!」「「「「」

その翌日、四人は約束通りチャイナ服で受けた。

「いや、良い物を見た」

第七話 昇格試験 後篇（後書き）

「なあ、これってマジなのか？」

「なにが？」

「いや、マンモスの墓場の事がだよ。」

「ああ、これは実際に俺のデッキの中に入っているカードだよ。」

「なんで！？なんで、マンモスの墓場！？レベル3のバニラモンスターなら他にもいるじゃん。ハウンド・ドラゴンやマッド・ロブスターやら」

「いや、最初はそうだったんだけど実は……」

「実は？」

「初代主人公が使ったカードを使ってみたいというのが理由かな？はははははは！」

「くらえ、スパイラル・シェイバー！！！！」

「あぶね！！何しやがる！攻撃力3000で攻撃してきやがって！！？」

「馬鹿か、お前は！？そんな理由でマンモスの墓場を入れたんかい！！」

「いや、他にも理由はあるぜ？ラビット効果で特殊召喚すると奈落の落とし穴で二体とも除外されるんだよね。だから、攻撃力1300のマンモスの墓場を入れたんだ。」

「なるほど、でも最終的にエクシーズで除外されたら意味が無いんじゃないか？」

「でも、墓地肥しにはなるだろ？そういう意味でもマンモスを選んだ。」

「なるほど、一応頭は使っているんだな。」

「一応とはなんだ、一応とは。でも、俺はマンモスで止め刺した事があるぜ。」

「うそだ！」「ひぐし風

「うそじゃね！手札に止めをさせられるカードがそろって勝てたんだ。」

「ありえね〜」

「では、また次回に会いましょう。」

「」「ばいばい」「」

試しに、止めを刺した時の手札

死者蘇生

グランモール

大嵐

の三枚です。最後のドロイーで死者蘇生を引いたので大嵐 グランモ
ール召喚 死者蘇生でマンモスの墓場という順で止めを刺しました。

第八話 登場！魁吏の精霊達（前書き）

今回は、ついに魁吏の精霊が登場します。
の内出していききたいと思います。

精霊は複数いますがそ

第八話 登場！魁史の精霊達

「・・・ネエ。ハヤク、ボクのコトにキツイテヨ」

「俺様をいつまでも無視するとはいい度胸だな、旦那。俺達は、早く旦那に会いたいんだぜ。」

「俺達に早く気づきな（いて）！！他の仲間達も待っているぜ（ヨ）。」「」

「はっ！な、なんだ、今の夢は夢にしてはかなりしつかりとした夢だったけど・・・」

とある朝、前回の昇格試験でラー・イエローに昇格が決まった魁史はベットの飛び上がるかのように起きた。この不思議な夢によって起こされた魁史、これが魁史と精霊達との最初の接触だった。

「さて、どうすっかな。暇だしデッキの調整でもするか、まずは明日香と戦った準獣デッキの中身を調整するかな。」

そついい、朝からデッキを調整し始め3時間くらいが経ったころドアから

「おーい、魁史少しいいか？」

『ドンドン』

十代の声やしドアを叩く音が聞こえてきた。

「ああ、いいぞ。鍵は開いてるから勝手に入ってくれ。」

そうすると、ドアの向こうには十代だけでなく翔と大地それと

「なんだ、チャイナと一緒にいたのか。」

「「チャイナって言わないで!!」「」

そう、前回の昇格試験で賭けに負けてしまい一日チャイナ服で過ごした明日香と美里がいた。

「どうした、みんな？わざわざ、ライイエローの寮に来るくらいだ何かあったのか？」

「まあ、そうなんだが・・・その前に部屋に入っていていいか？廊下だと、ちょっと」

確かに、オシリス寮と比べて広くなったが十代、翔、大地、明日香、美里が部屋の前で集まれば邪魔になる。

「わかった、とにかく入れよ。」

そして、みんな魁吏の部屋に入っていた、そして机の上に置いてあるカード達を見て大地は

「もしかしてデッキの調節でもしていたのか？すまない、邪魔をしてみてください。」

「ああ、気にしなくていい。邪魔されるのは、オシリス寮で慣れた、毎回デッキを弄っていると狙ったかのようにこいつらが部屋に突入し

てくるからな。」

魁吏は、十代達を指さしながら言った、言われた十代達は笑いながら視線を外したのは言うまでもない。

「で、どうしたんだ。十代達はいつもの事だとして、大地や明日香達と一緒にだなんて。」

「ああ、実は今日用があるのは俺じゃなくて。私達よ、魁吏。ということだ。」

魁吏の前に一步前に出てきた明日香が十代の言葉をさえぎり言った。

「明日香が俺にか？じゃあ、美里と大地はどうしたんだ。」

「私は、明日香さんと同じ理由で来ました。」

「俺は、面白そうだったから着いてきただけだ。」

美里も明日香と同じように一步前に出て、大地は笑いながら言った。

「なるほど、で俺に用って何だ？もう少しで、獣デッキにシンクロを混合するためにデッキを見直しているんだが。」

「そのシンクロに関係する事なの・・・」

そうすると、明日香と美里がいきなり頭を下げて

「お願い、シンクロ召喚とエクシーズ召喚について色々と教えて！私、最初は興味本心でしか考えていなかった。でも、貴方とのデ

ユエルしてもつと知りたいと思ったのお願い！」

「私も、魁吏さんのデュエルを見てもつと強くなりたいてって感じたのお願いします！」

二人の姿を見て魁吏は

「なるほど、いいぜ。その意気込み嫌いじゃないぜ。なら、明日香にあったシンクロとチューナ、それとエクシーズを見ないと、十代達も手伝えこの量を確認するのは大変なんだから。」

魁吏は、積み上げられた段ボールを指さしながら言った

「ああ、分かったぜ。よし、やるか！」

そして、皆でカードを探そうとすると美里が

「あ、あの、魁吏さん。私には探してくれないんですか・・・」

「お前用には、もう眼星は付いているんだよ。どこに置いたかな？え〜と、有った有った、ほらこれだよ。」

魁吏は、段ボールとは違う箱からカードの束を美里に渡した。

「な！！なんですか、このカードは!?!」

美里の反応を見た十代達も、美里に渡したカードを見た

「こ、これは・・・六武衆？いや、これは真六武衆!?!」

そう、美里に渡したカードは六武衆が進化し爆発力がとんでもないカード真六武衆シリーズだ。

「これは、美里が持っている真六武衆が進化した姿だ。試しに、どんな動きをするか見せてやるから良く見てろよ。」

「は、はい」

そして、真六武衆の主な動きを見せたら他の連中の動きが止り、次々と明日香と翔は顔を引きつりながら

「これは・・・」

「なんすか、この爆発力は」

大地は、眉間を押さえながら対策を考えていた。

「これは、場を固める前に瞬殺されるぞ・・・これに対して、どう対策をとれば」

十代はというと

「すげ〜、早く戦ってみて〜」と眼を輝きながら言っていた。

（作者は、大会で何度か戦いひどい目に合っています。あの爆発力は一体何なんだよ！手札にゴーズかトラゴ、バトルフェーダーがなければ一瞬だつて！！）

なんか、電波が飛んできたがそれは、置いといて

「後は、これをどう使いこなせるかはお前次第だ。がんばりな。」

しかし、美里は真六武衆を見ながら

「私なんか、こんな強力なカードを使いこなせるでしょうか……」

「はあくおい、美里」

「は、はい。」

そうすると、魁吏は美里の額にビツシ！！言い音のデコピンがした。

「あ、あう……な、なにをするんですか。」

「なにをするんですかじゃねえよ。あたしなんかなんていうな、強くなりたいたから此処に来たんだろ？だったら、絶対に使いこなすっていう気迫で行けよ。見込みない奴には、カードは絶対に渡したりはしないんだからよ。」

魁吏は、笑いながら美里の頭を撫でた。

「よし、次は明日香の奴だな。明日香のデッキは戦士だったよな？」

「え、ええ。何か、相性のいい奴はあるかしら？」

「そうだな。まずは、ジュツテ・ナイトこのカードは……」

こうして、3時間余り明日香に合うチューナーやらシンクロを選んだ。ついでに、大地にもシンクロ関係を分けようと思って言ってみたら

「俺は、シンクロよりもエクシーズ召喚に興味があるからそつちを重点に教えてくれないか」とエクシーズについて教えた。

その後、デツキの調節をするために何度かデュエルをした。

「しかし、美里の奴すごいな少し教えただけでかなり使いこなせるようになっていた。しかし、疲れた〜今日は早めに休むかな?」ソウダよ。カラダ八ちゃんと言えと「ああ、そうだな。無理して体を壊したらい・・・へんだ?」

不意に魁吏の頭の上から声が聞こえてきた。

「だ、だれだ!」

魁吏が上をむいてみるとそこには、体が機械で出来ており額にはloveと書いてあるウサギ?がこつちを見ていた。

「お、お前、もしかしたらいやもしかしなくても『メカウサー』か?」

魁吏がそういうとメカウサーは魁吏に向かって落ちてきた。

「ソウダヨ、ヨウヤクニンシキデキタンダね。」

「お前、もしかして精霊か?十代のハネクリボーみたいな。」

「へ、そうだ。ようやく気付いたか、旦那。」

メカウサーとは違う方から声が聞こえその方向を見てみると机の上に、背中に何やら大砲?を背負っている八虫類みたいなモンスター

がいた。

「お前、幻銃士か？」

そう、そこにいたのはメカウサーと共に獣デッキに入っているお気に入りカードの一枚幻銃士だった。

「そうだぜ、全くようやく俺達を見る事が出来るようになったか。こっちは、何度も呼びかけてたつて言うのによ。」

「呼びかけてた？もしかして、今日夢で見た奴はもしかして!？」

「ソウダヨ、ボクたちがずっとカイリにムかってヨビカケテいたんだヨ。」

メカウサーは魁吏のあぶらの上に乗って見ていた。

「なあ、何でいきなりお前達の事が見えるようになったんだ？今まで、ずっと見えなかったのに。」

「旦那、それは俺達を召喚したからだぜ。前回では俺達は召喚はされなかったからな、今回召喚してもらってようやく入口が安定して見る事が出来るようになったんだぜ。」

「そうか、前回はおとぼけしか使わなかったし見る事が出来なかったのか。所で、夢での話で他の仲間って他にもいるのか精霊か？」

魁吏は、メカウサーを抱きかかえながら幻銃士の隣に座った。

「ああ、他に3体程いるけどまだ召喚されていないか条件が適って

いないから現れる事が出来ないけどな。」

「条件？」

「ソウダヨ、ボクたちはチャンとジヨウケンをクリアしてミえる（実体化）デキルヨウニナツタンダ。」

「なるほど、お前らの条件は何なんだ？」

「俺の条件は、デュエルでフィールドに俺のトークンを三体以上出すことが条件だ。」

「ボクは、リクルータコウカでイッタイずつ、ばにダスコトがジヨウケンナンだよ。」

「そうか、なら名前を付けてやらないとな。でも、今日はもう眠いからまた今度考えてやるよ。お休み。」

「ああ、お休み旦那。」

「オヤスミ、カイリ。」

こうして、魁吏に精霊が付いた

第八話 登場！魁史の精霊達（後書き）

「なあ、なんでメカウサーと幻銃士が精霊なんだ？」

ああ、第5話に登場した獣デッキがあつたろ。このカードは、どっちも作った当時からずっと入っているお気に入りカードなんだ。

「なるほど。でも、お前の行きつけのカードショップでも『メカウサー使っているのにお前以外で見た事が無い』って言われたよな。」

そうなんだよ。こんなに可愛いし、効果で500ダメージは地味に痛いと思うんだけどな。

「そういえば、この二体どっちもバーン効果持っているよな？幻銃士は銃士と名のつくモンスター一体につき300のダメージだし。」

それは、たまたまだよ。

「他に精霊はいるのか？」

まあ、一軍から精霊を出そうかなと思っっている。

第九話 廃寮探検（前書き）

タイタン編のお話です。どうぞー！！

第九話 廃寮探検

「廃寮に探検だと？」

いつものように、十代達は魁吏の部屋に来ていた

「ああ、こないだレッド寮で怖い話をしていたら大徳寺先生から聞いたんだけど昔廃寮になった所があるらしいから探検しようって話になったから誘いに来たんだ。もちろん、行くだろ？」

十代は当然のように言ってくるが

「（廃寮・・・ってことは、若本のいやタイタンって言った方がいか此処は。デーモンデッキは見た感じめんどくさいけど、あの声を生で聴けるのは大きいな・・・多分デュエルするのは十代だろうし、念のためにデッキを一つ持って行けば大丈夫だろう。）よし、行こう！」

魁吏は机の上にあるデッキの一つを持ち制服の内ポケットへと入れ部屋を出た。

「しかし、気味が悪いな。幽霊は置いてもかなり怖いぞ。」

「そうっすね。ここまですす暗いと本当に何かでそうっす。」

「そう、言っな〜翔。そう言っていると出るフラグなんだな。」

翔は、腕を抱えながら左右を見ながら進みその後ろに隼人が続く。

「ちょっと、貴方達何をなっているの？」

「「ぎゃああああああ!!!」」

「きゃう・・・」

不意に、聞こえてきた声に翔と隼人はびっくりしてしまいその場で腰を抜かしてしまい座り込んでしまった。魁吏と十代は声が出た方を見てみると月明かりから姿がはつきりと確認できた。

「なんだ、明日香と美里じゃないか。どうしたんだよ、こんな時間にしかもこんな場所です？」

「それは、こつちのセリフよ。貴方達が大声を出したから美里がびっくりしてしまったじゃない。」

「あ、明日香さん。私は大丈夫だから・・・」

明日香の後ろには美里が居たが、さっきの翔と隼人の大声でびっくりしてしまったようで明日香の袖をしっかりと握り締めていた。

「あ、もしかして。明日香達も廃寮に肝試しに行くのか？」

十代は何時のように能天気だった。

「い、いえ。私は、明日香さんがこんな遅く外に出て行くのを見て追いかけてきただけです。」

明日香の方を見ながら美里は此処までの経緯を話した。

「貴方達、あそこに行くのは校則違反よ。早く帰りなさい。」

明日香は、少し睨みを利かせながら魁吏達の方を睨んだ。

「え〜お前も廃寮の所に行く所だったんだろ。なんで、俺達だけ帰らなきゃならないんだよ〜」

「違っわ。私は・・・」

「明日香、お前何か隠しているんじゃないのか。」

今まで黙っていた魁吏が静かに口を開いた。

「お前、もしかして廃寮の行方不明者の中に知り合いでもいるんじゃないのか？」

「っ!!」

魁吏が放った言葉に明日香は少なからず驚いてしまった。

「・・・ええ。行方不明者の中に私の兄『天上院 吹雪』が居たのよ。」

「「「「!!!!!!」」」」

魁吏以外は驚いた。

「なら、廃寮に行こうとしたのは何か手掛かりを探しに行く所と言った所か？お前も、かなり無茶をするな。」

「ほつといて頂戴。これは、私個人の問題なんだから首を突っ込まないで!!」

明日香は、走りながら廃寮の方へと走って行ってしまった。

「おい、魁吏!!」

「ああ、本当に世話がかかる姫だ。お前達も一緒に来い、はぐれると逆に危ない。」

「はい(っす!) (なんだな)」

「しかし、本当にボロボロだな。」

「でも、レッド寮よりはかなりいいぜ。俺、こっちに引っ越してこようかな? 翔達もどうだ。」

「「いやっす(なんだな)!!」」

さすがの二人もこの不陰気には無理があるらしい

「あら、これは・・・」

美里が何かに気づき手に取った

「どうした、美里。なにか、見つけたか?」

部屋の奥へと走って行くといつの間にか何やら怪しい所へと出た。

「明日香さん!!!」

美里が見る方に目を向けてみると棺に入れられた明日香がいた。そして、その後ろから

「誰だ、そこにいるのは!!!」

棺の後ろから深く帽子を被り長いコートを着た男が現れた。

「ふははははは!!! ようやく来たかあゝ小僧共、我はタイタン、闇のデュエルを受け継ぐ者。遊城十代に如月魁吏、貴様ら我とデュエルをしろゝい。我に書くことが出来たら彼女を解放しよう、しかし貴様らが負けた場合闇の罰を受けてもらう。」

「へ、話が早くていいや。じゃあ、此処は俺が「待て、十代。」どうした、魁吏?」

タイタンに向おうとした十代の前に魁吏が割り込んだ。

「すまないが、此処は俺にやらせてくれないか? 明日香を止められなかったのは俺の責任だから俺がケリを付けさせてほしい。」

十代は、魁吏の目を見て

「分かったよ、今回は譲るけど必ず勝てよ!!!」

「当然だ!!! 誰に言っただやがる!!!」

「ふん、どっちが先でも変わりはないし。貴様は二人は共に罰を受けるのだからなあ」

「それは、やってみるまで分からないぜ!!」

魁吏とタイタンはお互いに向きあいデュエルディスクを構えた。

「デュエル!!」

魁吏LP4000

タイタン LP4000

「俺のターン、ドロ―！俺は、フィールド魔法龍の渓谷を発動する。

」

場 龍の渓谷

「俺は、効果で手札のドラグニティ・ファランクスを墓地に捨てデッキからドラグニティを手札に持ってくる、俺はドラグニティ・ドゥクスを手札に加えそのまま召喚。」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・ドゥクス AKT1500

「お、今日はドラグニティかクロノス先生を倒してから使った所を見てないから楽しみだ。」

「今日は、どんな事が起きるのでしょうか。」

「さらに、ドウクスの召喚時効果により墓地にあるレベル3以下のドラグニティを装備する。俺は、墓地よりドラグニティ・ファランクスを装備する、さらにドウクスの効果より自分フィールドの存在するドラグニティと名のつくカード掛ける200攻撃力を上げる。」

ドラグニティ・ドウクス A K T 1 5 0 0 1 7 0 0

「俺は、さらに装備状態のファランクスの効果を発動しこのカードを特殊召喚する。」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・ドウクス A K T 1 7 0 0

ドラグニティ・ファランクス A K T 5 0 0

「さて、準備は整った。」

「準備だとしてそんな雑魚モンスターでぬあ〜にが出来るといふのだ。」

「タイタンは魁吏の場に召喚されたモンスターを見て笑ったがすぐにそれが間違いであると思い知らされる。」

「これが、その答えだ!!!レベル4のドラグニティ・ドウクスにレベル2ドラグニティ・ファランクスをチューニング!!!」

「チューニングだとして!?!」

「今ここに、仲間達の力で相手の強大なる力を突き破れ!!!シンク

口召喚 現れるドラグニティ・ゲイボルク!!」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・ゲイボルク A K T 2 0 0 0

「シンクロ召喚だと、何だそれは。」

「俺は、さらに二枚カードを伏せてターンエンド!」

魁吏 場

モンスター

ドラグニティ・ゲイボルク A K T 2 0 0 0

魔法・罫

伏せカード 2枚

「くつ。私のターン、ドロオー!私は、デーモンソルジャーを攻撃表示で召喚。さらに、装備魔法デーモンの斧を装備する。」

タイタン(若本?) 場

モンスター

デーモンソルジャー A K T 1 9 0 0 2 9 0 0

魔法 罫

デーモンの斧

「バートルだ、デーモンソルジャーでドラグニティ・ゲイボルクを

攻撃！」

「なら、ドラグニティ・ゲイボルクの効果を発動！！」

「なあんだと！？」

「こいつは、墓地にある鳥獣族を除外する事でその攻撃力分アップさせる。俺が除外したのはドラグニティ・ドゥクス、攻撃力は1500よって攻撃力は」

ドラグニティ・ゲイボルク A K T 2 0 0 0 3 5 0 0

「なあんだと、それでは！」

「迎撃しろ、ゲイボルク！魔槍天羽」

剣から斧に変わったデーモンソルジャーにゲイボルクは持っていた槍で胸を貫いた。

タイタン L P 4 0 0 0 3 4 0 0

「く、我は二枚カードを伏せターンエンド！！」

タイタン 場

モンスター 0

伏せカード2枚

「俺のターン、ドロー！俺は、龍の渓谷の効果でファランクスを墓

地に捨てドラグニティ・ブラックスピアを手札に加える。俺は、霧の谷のファルコンを召喚。」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・ゲイボルク AKT2000

霧の谷のファルコン AKT2000

「その瞬間、伏せカードオープン！激流葬、フィールドのモンスターをすべて破壊する！！」

「させるか、チェーンでファルコンを生贄にゴットバードアタックを発動！！発動中の激流葬と伏せカードを破壊する！！（破壊したのは・・・ヘイトバスターかいやらしいカード入れやがって）」

「だが、お前のモンスターは全滅だあ！」

「ち、俺はカードを一枚伏せターンエンドだ。」

魁吏 場

モンスター0

伏せカード1

「私のターン、ドロー。我はインフェルノ・クインデーモンを召喚！さらに、フィールド魔法万魔殿 パンデモニウム 悪魔の巣窟を発動するう！」

場 龍の渓谷 万魔殿 パンデモニウム 悪魔の巣窟

タイタン 場

インフェルノ・クインデーモン AKT900

「やっぱりそれが入っていたか。(まずい、龍の渓谷を破壊させた。)
」

「インフェルノ・クインデーモンでダイレクトアタック!」

「うわっ!」

魁吏LP4000 3100

「カードを一枚伏せ我はターンエンド!そして、闇がお前の体を蝕むぞ。」

魁吏の体の一部が消えた

「か、魁吏の体が!?!」

「大丈夫っすか、魁吏君!」

「ふあああ、どうするんだな!?!」

「魁吏さん……」

十代達は体の一部が消えた事に驚き、美里は涙目になっている。

「大丈夫だ、安心して見てろ!」

タイタン 場

モンスター インフェルノ・クインデーモン A K T 9 0 0

伏せカード1

「俺のターンドロ―！よし、俺は手札から調和の宝札を発動する！」

「調和の宝札？」

「なんすつか、その魔法カードは？」

「このカードは手札にある攻撃力1000以下のドラゴン族チューナーを捨てて新たにデッキから二枚ドロ―する。俺は、手札からドラグニティ・ブラックスピアを捨てて二枚ドロ―、俺はドラグニティ・レギオンを召喚！召喚時効果で墓地のドラグニティを装備する、俺はフアランクスを装備。」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・レギオン A K T 1 2 0 0

魔法 罫

ドラグニティ・フアランクス

「しかし、そのような雑魚で何かできる。」

「俺は、これで終わりなんて言っていないぜ！俺は、装備状態のレギオンをゲームから除外し現れる、ドラグニティの王よ、ドラグニティ・レヴァティーンを特殊召喚！こいつはフィールドにドラグニテ

イを装備しているドラグニティを除外する事で手札から特殊召喚できる、そしてレギオン達と同じように召喚・特殊召喚時墓地の存在するドラゴン族を装備する出来る俺はドラグニティ・ゲイボルクを装備!」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・レヴァティン A K T 2 6 0 0

魔法・罨

ドラグニティ・ゲイボルク

「なんだとお、攻撃力1200の雑魚が攻撃力2600のモンスターに変わった!?!」

タイタンが驚いているが後ろでも十代達が

「すげー高レベルモンスターを生贄無しで召喚しやがった!」

「装備したモンスターを除外する事で特殊召喚出来るなんて、すごいモンスターす・・・」

「でも、なんでシンクロモンスターを装備したんだろ?今までは、フアリンクスだったのに。」

「確かにそうっすね。」

「あいつにはまだ隠された能力があるのか?」

「バトルフェイズだ!ドラグニティ・レヴァティンでインフェルノ・クインデーモンを攻撃!秘剣 つばめ し!」

「「「こ」で、ネタか（ですか）（っすか）！」「」」

「ふははは、甘いぞ！トラップ発動、万能地雷グレイモア、これで
きさまのモンスターは破壊だあ！」

レヴァティンの足元で爆発が起きて破壊された。

「ああ、せつかくのモンスターが。」

「これで、またお前のモンスターは0だあ。」

「・・・それは、どうかな。」

魁吏は笑いながらタイタンを見た。

「何を言っている？」

爆炎により舞いあがった煙が晴れていくとそこにいたのは装備され
ていたゲイボルクが居た。

「な、なぜだ！？なぜ、こいつがフィールドに？」

「ドラグニティ・レヴァティンの効果が発動したんだ。こいつは相
手の効果で破壊された時像微状態のモンスターを特殊召喚出来る、
よって装備されていたドラグニティ・ゲイボルクを特殊召喚したん
だ！」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・ゲイボルク AKT2000

「こいつは、バトルフェイズ中の特殊召喚だ！よって攻撃は可能、インフェルノ・クインデーモンに攻撃、魔槍天羽！」

「があああ！！！！！」

タイタン LP3400 2300

「俺はターンエンド！」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・ゲイボルク AKT2000

「なかなかやるな、小僧！我のターン、強欲は壺を発動させてドロ！。手札から使者蘇生を発動させインフェルノ・クインデーモンを復活させる。そして、ふはははは 墮落 フォーリン・ダウンを発動！」

「な、なんだと！！！！！」

「墮落は自分フィールドにデーモンが居る時相手モンスターを奪う装備カードだ。よってゲイボルクはいただく！」

タイタン 場

モンスター インフェルノ・クインデーモン AKT900

ドラグニティ・ゲイボルク AKT2000

魔法・罫

墮落

「バトルフェイズ、二体でダイレクトアタック！」

「ぐああああああ！！！！」

魁吏 LP3100 200

「我はターンエンドだあ。さあ、体が消えるぞ。」

魁吏の体の全体がほぼ消えた

「！！！！魁吏（君）（さん）！！！！！！！！！！」

「まだだ、俺は。まだ負けてねえ！！俺のターンドロ！手札から強欲な壺を発動、二枚ドロする、（来た！！）俺は、ドラグニティ・ドウクスを召喚しフランクスを装備、そして解除させ特殊召喚、最後にチューニング！ドラグニティの戦士よその力で悪魔を打ち滅ぼせ！シンクロ召喚 現れるドラグニティ・ヴァジュランダ！！」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・ヴァジュランダ AKY1900

「ヴァジュランダの効果発動し、墓地からドラグニティと名のついたドラゴン族を装備する。フランクスを装備する。」

「またそいつか。いい加減あきるぞお。」

「うるせえ。こいつが特徴なんだ、俺は最後の効果を発動する！！」

1ターンに1度このカードの装備させられているカードを一枚墓地に送る事で攻撃力はエンドフェイズまで倍になる、俺は、装備状態のフアラックスを墓地に送る！」

「な、なんだと!!それでは・・・」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・ヴァジュランダ A K T 1 9 0 0 3
8 0 0

「攻撃力3800だと・・・」

「行くぞ、これが最後だ!ドラグニティ・ヴァジュランダでインフエルノ・クインデーモンに攻撃、雷槍一閃!!」

「ぐああああああ!!!!!!!!」

タイタン L P 2 3 0 0 - 6 0 0

「ちい、今回は此処までだあ。さらばあ!!!!」

タイタンは、煙球を投げ逃げた。魁吏もその場に座り込んだ。

「あぶね〜ドウクスを引けなかったらマジで負けた。あそこで、墮落なんか引くか普通・・・」

そこに

「大丈夫か、魁吏?お前が、あそこまで追い込まれるなんてあいつ

中々強かったな。」

「でも、勝てたから良かったす。」

「そうなんだな。本当に良かったんだな。」

「魁吏さん、本当に無事でよかったです。本当に……」

「悪かったな、皆。しかし、デーモンデッキに此処まで追いつめられるとはまだまだ改良の余地はあるかな。」

魁吏は十代に手を貸してもらい立ち

「さて、明日香を連れてさっさと此処から出ようぜ。いい加減気味が悪くてたまらん。」

明日香を背負い、歩き始めた。

「ん！（何でしょう、魁吏さんが明日香さんを背負った瞬間胸がもやもやしました……）」

そして、外に出たあたりで明日香が眼を覚ました

「じ、じじは……」

「よつやく、起きたか。」

明日香は自分が背負われている事に気づき

「か、魁吏！！なんで、貴方が！？」

「お前さ、少しは仲間を頼れよ。ほらよ。」

魁吏は写真を明日香に渡した

「じ、これは！どこで、これを？」

「廃寮の中に合ったんだよ。やっぱり、お前の兄さんの写真だったか。」

「ええ、兄さんは天を10と書いてたのよ。 ありがとう、これだけでも見つかってよかったわ。」

「さて、眠いから早く送って帰るか。」

第十話 VS十代 属性融合モンスター（前書き）

ついに、制裁デュエル前までやってきました。少しずつストックが無くなってきました……

いつまで、このペース保てるか不安です。

第十話 VS十代 属性融合モンスター

廃寮事件から数日が経った朝随分ひどい起こされ方をされていた

ドンドン！！！

「うぜえなあ。なんだよ、人が気持よく寝ている時によ！！」

「早く、開ける！！開けなければドアごと爆破するぞ！！」

朝からすごく物騒な事をドアの向こうから言っている。

「なんだ、てめえらは。」

魁吏はドアを開け、騒いでいた奴らを睨んだら隊長らしき女が

「我々はアカデミア論理委員会だ！如月魁吏、貴様には廃寮不法侵入の疑いで捕縛させてもらう。大人しく我々と一緒に来てもらおう。」

女が手を上げた瞬間、数人の男が魁吏を掴もうとした瞬間

「俺に気安く触るな、屑ども。」

掴もうとした男たちの溝を的確に殴り倒した。

「き、貴様！反抗する気か！」

「うるせえ、一緒には行ってやる。だが、俺には触れんじゃね。今

度は、溝じゃすまねえぞ。」

そして、魁吏は校長室に連行された。

「「退学！！！」」

「君たちゝは、侵入禁止とされている旧ブルー寮に侵入したのゝネ。これは、重大な校則違反なのゝネ。」

「（ち、何時聞いてもムカつく話し方だけ。）確かに、我々は旧ブルー寮に侵入しました。しかし、それだけで退学というのは酷すぎませんか。」

「そうだけ、校長先生。俺達にチャンスくれよ、お願いだ！」

「僕もお願いします。」

二人が頭を下げた後渋々、魁吏も頭を下げた。

「クロノス教諭、確かにいきなり退学は酷すぎないかね。何かしらチャンスを上げてても良いんじゃないのかね。」

「むゝん、ならデュエルで決めるのゝネ。もし、貴方達が勝つたら退学は無しで10枚の反省文許すのゝネ。負けたら退学、制裁タッグデュエルなのゝネ。」

「デュエルで決めるのか、面白いじゃんか！受けて立つぜ、なあ、翔！魁吏！」

「ちよ、ちよっと待ってほしいっす。タッグって言っても僕たちは

三人しかいないっすよ。それは、どうするんスか？」

「その一人は俺がやるから大丈夫だ、翔。」

「か、魁吏君。一人で、二人と戦うなんて……」

「その心配はありません〜ノ、ならシングル戦も用意すればいい事なの〜ネ。君達は他人の心配しないで自分の心配でもしてるの〜ネ。」

「ほら、翔。クロノス教諭もこう言っているんだ、部屋に戻って対策でも練ろっぜ。」

「わ、分かったッす。」

魁吏達は真っすぐ魁吏の部屋に向かった。

「ごめんなさい、私のせいで貴方達がこんな事になってしまつて。」

明日香は頭を下げ謝ってきた

「魁吏さん、一人で戦つて聞いたんですが大丈夫なんですか？」

美里もどうやら、騒ぎを聞き部屋までやってきていた

「俺は、元より一人で戦つた方が合っているし下手に組んだらバランスが崩れるしな。それと明日香。気にするな、最終的にあそこに行つたのは俺達の意味なんだからお前が気にする事じゃないよ。それより、俺はともかく十代と翔のデッキを改良する必要があるな。」

「俺達のデッキをか？」

十代は、あぶらを掻きながら魁吏の方を見た。

「ああ、制裁デュエルだからな。どんな相手が来るか分かったもんじゃない。だから、少しでもお前達のデッキを改良する。ピークロイドはともかくE・HEROについては俺もデッキを持っているから少なからず分かる。」

「えっ！魁吏、お前もHEROデッキを持っているのか！」

「ああ、お前のは融合モンスターや戦術が少し違うがな。よし、十代表に出ろ。」

「なんでだ？」

「今から、お前に渡すカードを実戦で覚え込ませる。翔は、このデュエルを見て対策を考えながらデッキの構築だ。いいな。」

「は、はいっす。よろしくお願いします。」

そして、ライイエローより少し離れた林の中

「「デュエル！！」」

魁吏 LP4000

十代 LP4000

「そういえば、魁吏と戦うのってこれが初めてじゃないか。」

「ああそうだな。全く、こんな風にデュエルしたくはなかったが仕方ないか。先攻は俺がもらう！」

「ああ、来い！魁吏！」

「俺のターン！俺は、E・HEROエアーマンを召喚、召喚時効果によりデッキからE・HEROオーシャンを手札に加えカードを二枚伏せターンエンド！」

魁吏 場

モンスター E・HEROエアーマン AKT1800

魔法・罫

伏せカード二枚

「見た事のない、HEROだな。でも、こっちも負けてられないぜ！俺のターン、ドロー！」

十代は手札を見た瞬間笑った。

「（おい、その笑い顔はなんだ・・・）」

「俺は、手札から融合を発動！手札のフェザーマンとバーストレイイを融合、現れるE・HEROフレイム・ウィングマン！」

「でも、それは読んでいた！リバースカード発動、奈落の落とし穴！攻撃力1500以上のモンスターを破壊し除外する！」

「げっ！させるか、速効魔法 融合解除を発動し素材のモンスター

を特殊召喚する。来い、フェザーマンとバーストレディ！」

十代 場

モンスター E・HEROフレイム・ウィングマン E・HERO
フェザーマン AKT1000

E・HEROバーストレディ AKT1200

「全く、いきなり融合とかいつ見てもあり得ない引きだな。おい。」

「魁吏、安心するのは早いんじゃないか。俺はまだ、通常召喚をしてないぜ」

「……おい、まさか」

「二体のモンスターを生贄に來い、E・HEROエッジマン！」

十代 場

モンスター E・HEROエッジマン AKT2600

「ふざけんなあー！なんだ、その引きは！……」

「行くぜ、エッジマンでエアーマンを攻撃！パワー・エッジ・アタック」

「くそ。」

エッジマンの攻撃によりエアーマンは破壊された。

魁吏 LP4000 3200

「俺は、カードを一枚伏せてターンエンド!」

十代場

モンスター E・HEROエッジマン AKT2600

魔法・罾

伏せカード1枚

「す、すごい。まだ、始まったばかりなのに・・・」

「魁吏の罾にとっさに反応してさらに、上級モンスターを呼び出すなんてすごいわね。」

「魁吏さん・・・」

三人は序盤から相手の読みあいをする二人に唾然としていた。

「くそ、フレイム・ウィングマンを上手く回避できたと思ったらこいつかよ。仕方ね、さっさとこいつを倒すか。」

「な!攻撃力2600のモンスターを倒すですって、モンスターも無いのにどうやって!?!」

「俺のターン、ドロ！俺は、エヴォルテクター シュバリエを攻撃表示で召喚！」

魁吏 場

モンスター エヴォルテクター シュバリエ AKT1900

「HEROじゃないんだな。でも、攻撃力1900で攻撃力2600のエッジマンをどう倒す！」

「こつやるんだよ、リバースカードオープン、デュアルスパーク！こいつは自分フィールドに存在するレベル4のデュアルモンスターを一体生贄にフィールドのカードを一枚破壊する。その後、デッキから一枚ドロする。俺は、エッジマンを選択！」

電撃を纏ったシュバリエがエッジマンに体当たりし破壊した。

「エッジマン！こんな、簡単に破壊されるなんて……」

「俺は、デュアルスパークの効果で一枚ドロ。さらに、魔法カード融合を発動！」

「！？来たか、魁吏のHEROが！」

「俺は、手札の沼地の魔神王とE・HEROオーシャンを融合！氷の世界から現れる、E・HERO アブソルートZERO！」

魁吏 場

モンスター E・HERO アブソルートZERO AKT2500

「おお、見た事のないHEROだ！」

十代も見た事のないHEROを見てテンションも上がってきている

「こいつは、HEROと水属性の属性融合モンスターの一体だ！」

「『『『属性融合!?!?!』』』」

「そう、ZEROは水その他にも火、風、闇、光、地の計6つの属性融合モンスターがHEROには存在する。」

「なんて、モンスター達なの・・・」

「どう言う事ですか？」

翔は、明日香が言った意味が分かっていない様子で美里が

「翔さん、つまり十代さんがいつも使っているフレイルム・ウィングマンの素材のフェザーマンとバーストレディはそれぞれ風属性と火属性なのでフェザーマンを属性の素材にすれば風属性の融合モンスターにバーストレディを属性の素材にすれば火属性の融合モンスターになるというわけです。しかも、属性に任せずにそのまま融合してフレイルム・ウィングマンにする事も可能なんです。」

美里の丁寧で分かりやすい説明を聞いた翔は

「なら、状況によって融合先を変更出来るってことじゃないですか！」

ようやく、この強力さに気づいたようだ。

「強力だな、属性融合モンスター。くく他のモンスターも早く見てみたいぜ！」

「おい、そんな悠長な事を言っている場合か？俺は、アブソルート ZEROで十代にダイレクトアタック！瞬間氷結！」

「まだ、ライフを削られるつもりはないぜ！リバースカードオープン、攻撃の無力化！」

「防いだか・・・俺はターンエンドだ。」

魁吏 場

モンスター E・HERO アブソルートZERO AKT2500

魔法・罫

伏せカード1枚

「へへへ、俺のターン、ドロー！俺は手札からバブルマンを召喚、効果により二枚ドローする！」

「（こいつ、まじでチーとじゃないのか！？しかも、バブルマンはアニメ効果だし・・・なんでOCGだと弱体化したんだろ。）」

「俺は、魔法カード融合回収を発動しバーストレディと融合を手札

に加えるそして、融合を発動し手札のE・HEROクレイマンとバーストレディを融合！来い、E・HEROランパートガンナー！」

十代の場に盾を持った女性型モンスターが現れた。

十代 場

モンスター	E・HERO	ランパートガンナー	DEF 2500
	E・HERO	バブルマン	DEF 800

「おい、何にも居なかったはずなのに何で此処まで場が固まっている……」

「さあ、なんでだろうな。とにかく、俺はランパートガンナーの効果発動、攻撃力を半分にしダイレクトアタックが出来る！ランパートショット！」

「ぐあああああ……」

魁吏 LP3200 2200

「俺は、ターンエンドだ！」

「（このままじゃ、まずいな。）俺のターン、ドロー！俺、融合回収を発動し融合とオーシヤンを手札に加える。そして、俺はE・HERO フォレストマンを守備表示召喚。」

魁吏 場

モンスター E・HERO アブソルートZERO AKT2500

「さらに、融合を発動！俺はフィールドのZEROと手札のオーシヤンを融合しZEROを融合召喚！」

皆、なぜZEROを融合しZEROを召喚したか不思議に思った。

「なあ、なんでわざわざZEROを素材にしたんだ？それなら、フォレストマンでも良かったのに。」

十代最もの疑問を魁吏にぶつけ、魁吏は含み笑いながら

「それは、ZEROの効果を発動するためだ！ZEROの効果発動、このモンスターがフィールドを離れた時、相手フィールドのモンスターを全て破壊する！くらえ、疑似サンダーボルト！！」

「な、なんだと！」

十代の場にいたランパートガンナーとバブルマンは体の表面化凍った瞬間粉々に砕け散った。

「なんて、効果なの・・・フィールドを離れただけで相手モンスターを破壊するなんて」

「これじゃあ、あのモンスターを破壊した瞬間巻き込まれて破壊されじゃないっすか！」

「それだけじゃない。今みたいに自分で行為にフィールドを離れさせれば相手に場を0にしてダイレクトアタックが可能になる。」

「行くぜ、十代！アブソルートZEROでダイレクトアタック、瞬間氷結！」

「うひひひひ、さみい！」

十代 LP4000 1500

「俺は、一枚カードを伏せてターンエンド。」

魁吏場

モンスター E・HERO アブソルートZERO AKT2500
E・HERO フォレストマン DEF 2000

魔法・罫

伏せカード2枚

「俺のターン、ドロー！来たぜ、永続魔法 命削りの宝札を発動するぜ！デッキから五枚ドローし五ターン後手札を捨てる。」

「（こいつ、主人公の中でも一番の引きをしてないか？しかも、引いたカードの中に多分・・・）」

「俺は、魔法カード強欲な壺を発動しさらに二枚ドロー！そして、戦士の生還を発動、墓地からフェザーマンを回収し融合を発動する。手札のフェザーマンとバーストレディを融合し現れる、フレイムウイングマン！」

十代場

モンスター E・HEROフレイム・ウィングマン AKT2100

「また、こいつか・・・なら、手札には。」

「さあ、HEROの戦いにふさわしい舞台に行こうぜ、魁吏！フィールド魔法、魔天楼 スカイスクレイパーを発動！」

場 魔天楼 スカイスクレイパー

「やっぱり引いていたか！」

「これで止めだ！バトル、フレイム・ウィングマンでE・HEROアブソルートZEROを攻撃、フレイムシュート！」

「悪いが、お断りだ！リバーカードオープン、速効魔法 マスクド・チェンジ！こいつは、自分フィールドにいるE・HEROをM・HEROに変身させる！」

「……M・HERO!?」「……」

「俺は、ZEROを変身させる。来い、M・HERO ヴエイパー！」

魁吏 場

モンスター M・HERO ヴエイパー AKT2400

「へ、でも攻撃力はZEROの方が高かったな。どっちにしろ、これで終わりだ！」

「……十代、忘れたか？ZEROのモンスター効果を。」

「あー！しまった、これもフィールドを離れた事に！」

「そういう事だ！ZEROの効果再び発動、疑似サンダーボルト！」

「く、俺はまだ通常召喚を行っていない。俺は、フレンド・ドックを守備表示で召喚しカードを2枚セットしターンエンド。」

十代 場

モンスター フレンドック DEF 1200

伏せカード2枚

「俺のターン、ドロー！ここで、フォレストマンの効果を発動、墓地又はデッキから融合を手札に加える。俺はデッキから融合を手札に加える。」

「へー融合回収モンスターか、毎ターン融合が手札に戻ってくるのはいいな。」

「俺は、今加えた融合を発動し、フィールドのフォレストマンと手札の炎属性、エヴォルテクター シュバリエを融合！」

「炎属性！来るか、二体目の属性融合モンスター！」

「燃え上がり、全てを灰にしろ！融合召喚、E・HERO ノヴァ・マスター！」

魁更 場

モンスター	M・HERO	ヴェイパー	AKT	2400
	E・HERO	ノヴァ・マスター	AKT	2600

「あれが、二体目の属性融合モンスター炎のノヴァ・マスターだね。」

「体全体が燃えているっす。どんな、効果を持ってるんすかね。」

「これで、水と炎・・・やっぱり、順応性が高いモンスター達ですな。」

「ええ、相手はどっちの属性で融合するかを考えて戦略を練らなくてはいけないからかなり、厄介なモンスターね。」

「くっかつこいいぜ！炎の戦士、ノヴァ・マスター、どんな能力を持っているんだ！」

「行くぞ、十代！ノヴァ・マスターでフレンドックを攻撃。フレイルム・メテオ！」

ノヴァ・マスターが放った炎の岩がフレンドックに直撃し破壊した。

「その瞬間、ノヴァ・マスターの効果発動！このモンスターが相手モンスターを破壊した時デッキから一枚ドローする。」

「ドロー効果モンスターか、相手を破壊するたびにドローし手札を増強か・・・」

「ただでさえ、融合は手札の消費が激しいからな。ドロー効果はか
なり、使えるぜ。」

「でも、俺もフレンドックの効果を発動！墓地からE・HEROと融合を手札に加える。俺は、墓地からバブルマンを手札に加える。」

「M・HERO ヴェイパーでダイレクトアタックだ、フリアティクエクスプロージョン！」

「させないぜ、リバーカードオープン！聖なるバリア ミラーフ
オース、攻撃モンスターを全て破壊するぜ！」

「それはどうかな、ヴァイパーの効果は魔法・罠・効果モンスター
の効果では破壊されない！破壊されるのはノヴァ・マスターだけだ、
すまないノヴァ・・・攻撃続行！」

「うわああああ」

十代 LP1500 - 900

「くゝ負けた。今度は勝つからな、魁吏！」

倒れた十代に手を差し出し立たせる魁吏

「なあ、なんでノヴァの攻撃時に聖バリをはつどつさせなかったんだ？発動すればまだ、生き残れたのに」

「ああ、それは」

十代が手札を見せてきた

「な！」

そう十代の手札にはミラクル・フュージョンとスパークマンが握られていた。もし、このターンでケリを着けていなかったらミラクル・フュージョンでフレイム・ウイングマンそして回収した融合でスパークマンと融合しシャイニング・フレイムウイングマンになっていた。

「あぶね〜ギリギリだったぜ……」

「でも、結果的には負けちゃったけどな」

「さてと、十代。これで、分かったと思うがお前に渡すのはオーシヤン、フォレストマン、エアーマン、そして属性融合モンスターを渡す。これらと、今お前が持つE・HEROを混ぜて変幻自在のデッキにする。翔は、ロイドデッキの内容をもう一度確認し直す、タッグデュエルなんだ。一人だけ強くても意味はないからな。」

「わ、分かったす。兄貴の足手まといにならないように頑張るっす！」

翔は、手を握り直し意気込みを入れると翔の肩を叩きながら

「その通りだ、翔。お互いに頑張ろうぜ！」

「よし、一回部屋に戻って調整だ！明日香と美里も手伝ってくれ。三沢、お前の知識には期待しているぜ。」

「いいわよ。」

「分かりました。」

「おう、分からない事があつたら言ってくれ。完璧に仕上げて見せる。」

おまけ

部屋に戻りデスクの調節をしていたら十代が机の上にある一つのデスクケースに気が付いた。

「魁吏、これはなんだ？」

「ああ……これは、俺の持つデスクの一軍だ。」

「「「「「一軍!?」「」「」「」

すると、三沢は

「となると、今度の制裁デュエルではこのデッキで出るのか？」

魁吏は、少し困った表情しながら机の上にあったデッキを手に取った。

「いや、このデッキでは出ない。」

「な、なんでだ？このデッキは一軍なのだろう、ならなんでこのデッキを使わないんだ！？」

「そうっすよ、今度のデュエルで勝たなきゃ退学になるんすよ！」

「このデッキは少しばかり癖のあるデッキでな、それとこいつは相手を徹底的に叩き潰す為のデッキなんだ。だから、今回は使わない・・・まあ、いつも持ち歩いてはいるがな。」

「そうなんだ、残念だな～お前の一軍と戦ってみたかったな。」

「まあ、機会があつたらな・・・」

魁吏は、手に取ったデッキケースを引き出しの中に閉まった。

その様子を見ていた、美里は

「（魁吏さんのあのデッキは一体何なのでしょう？様子が今まで違いましたし今まで使っていたデッキとは何か違うような雰囲気か・・・）」

第十話 VS十代 属性融合モンスター（後書き）

制裁デュエルは三回位に分けると思います。では、お楽しみに

第十一話VSカイザー（前書き）

カイザーとのデュエル篇です。かなり、難しかったです・・・

第十一話 VS カイザー

「翔、どこだ！！！！」

十代のデッキを直し、翔のデッキを許可したは良いがいざ実践を行うとどうしてもプレミスを連発してしまい原作通り翔は逃げ出してしまった。

「翔！！てめ、デッキを強化の強化は終わってるんだから後は練習あるのみなんだから出てきやがれ！！！」

「魁吏さん、それだと逆に出てきませんよ。」

額に怒りマークを作った魁吏に美里は冷静に突っ込んだ。

「でも、何処にいるのかしら？翔君は。」

「後は、海岸を探してみるか。もし、逃げる前だったら飛び蹴りをかまして逃げられなくしてやる。」

足を振り回しながら、準備をする魁吏に十代は

「おい、魁吏。デュエルが待ってるんだからほどほどにな。」

「「いや、ほどほどでもだめだから！！（ですー！！）」

「アニキ、ごめん。僕にはやっぱり無理っす・・・さよなら。」

翔はいかだのオールを漕ぎ始めた瞬間

「誰の断わりを貰って逃げようとするんじゃない、ボケ!!」

「へ!!」

魁吏は、まるで某連金の戦士のような蹴りでいかだを叩き割った。

「ぎゃああああ!!」

「翔、大丈夫か！魁吏、少しは手加減位しろよ。」

「なに、さっきのキックは……まるで流星みたいだった。」

「どうやってたら、あんな直角に落ちる事が出来るんですか。」

陸をみると走って追いついた十代達が居た。

「翔！お前、デッキが少しくらい上手く回せなくてプレミスを連発したくらいで逃げるとはどういう事だ!! ともに練習しなくちゃ、回る事を出来ないしプレミスもするだろうが!!」

「魁吏君……でも、僕がどうやって上手く出来るわけがないし、アニキの足を引っ張るよ。それなら、僕より魁吏君の方が……」

翔の言葉を聞いた魁吏は翔の胸倉を掴んだ。

「ふさげんな!! 前にも言ったが、俺はタッグデュエルをする気はないしそれ用のデッキも持ってはいない!! お前が、逃げ出したら自動的に十代は退学が決定してしまうんだぞ!!」

「でも、僕なんかじゃ・・・」

「情けないな、翔。」

魁吏が翔をどなっていると後ろから声が聞こえた。

「お、お兄さん。」

岩陰から出てきたのは翔の兄貴ことカイザー亮だった。

「ここで、去るか。それも、良いだろう。」

「お、お兄さん・・・」

カイザーは翔に背中を見せ歩いていこうとするが。

「ちょい待ち、カイザー。」

魁吏はカイザーを呼びとめた。

「なんだ、如月魁吏。」

「お前、実の弟に何にも言わないつもりか。」

「それも、仕方がない事だ。」

「てめー。なら、俺とデュエルをしろ。」

魁吏は腕に付けていたデュエルディスクを胸の前に掲げた。

「何？どういつつもりだ。」

「お前が、翔に何にも言わないなら俺が翔に伝えてやる。だが、今のこいつに言葉を通じない。なら、デュエルをして教えてるんだよ。」

「魁吏君……」

「良いだろう、如月魁吏。お前とは一度戦ってみたいと思っていた所だ。」

カイザーも同じようにデュエルディスクを掲げた。

「行くぞー!!」

「デュエル!!」

「先攻は、俺がもらうぞ。ドロー、俺はスクラップビーストを攻撃表示で召喚し、カードを二枚伏せターンエンド」

魁吏 場

モンスター スクラップ・ビースト A K T 1 6 0 0

伏せカード二枚

手札三枚

「俺のターン、融合を発動！手札のサイバードラゴン二枚を融合し
来い、サイバードラゴン!!」

「ちっ、いきなりツインかよ。(でも、エンドよりはマシか。)」

「バトル、サイバーツインでスクラップ・ビーストを攻撃！！」

「おっと、悪いがそれはさせないぜ。リバーカードオープン、月の書。ツインは裏側にしてもらっぜ。」

魁吏が発動した月の書によってツインは裏側になった。

「かわしたか、ならサイバーフェニックスを守備表示で召喚し一枚カードを伏せターンエンド。」

「エンドフェイズ時にスクラップ・スコールを発動。効果によりフィールドのスクラップを一体選択し、その後デッキからスクラップと名のついたモンスターを墓地に落としデッキから一枚ドロウする。そして、選択したスクラップを破壊する。その瞬間、スクラップ・ビーストの効果を発動！このカードがスクラップと名の付いたカードによって破壊された時に墓地からこのカード以外のスクラップと名の付いたモンスターを手札に加える、俺はスクラップ・キマイラを手札に加える。」

「スクラップ・スコールの時に落としたモンスターか。」

カイザー 場

モンスター 伏せモンスター 一枚

サイバー・フェニックス DEF1600

伏せカード一枚
手札一枚

「俺のターン、ドロウ。俺は、ワンフォーワンを発動し手札からレ

ベルステイラを墓地に送りデッキから黄泉ガエルを特殊召喚する。そして、黄泉ガエルを生贄にスクラップ・ゴーレムを召喚。効果を発動し来い、スクラップ・ビースト！」

「なるほど、蘇生効果を持つモンスターか。」

「ああ、こいつには一ターンに一度墓地に存在するレベル四以下のスクラップを自分または相手の場に特殊召喚する事が出来る。行くぞ、レベル五のスクラップ・ゴーレムにレベル4のスクラップ・ビーストをチューニング！今ここに、破棄された龍がその力を振るうために起動する！シンクロ召喚、スクラップ・ツイン・ドラゴン！！！」

「来たか、シンクロ召喚。」

「あの、ドラゴンは!?!」

「万丈目君を倒した時に使ったカード！」

「墓地からレベルステイラの効果を発動！スクラップ・ツイン・ドラゴンのレベルを一下げ墓地からレベルステイラを特殊召喚しスクラップ・ツイン。ドラゴンの効果を発動！俺は、レベルステイラを破壊しカイザーのサイバー・フェニックスと伏せカードを手札に戻す！」

「なら、チェーンしリバーカードオープン。サンダーブレイク、サイバー・フェニックスを捨てスクラップ・ツイン・ドラゴンを破壊させてもらおう。」

天から落ちた雷がスクラップ・ツイン・ドラゴンを貫いた。

「すげー、お互いに初っ端から飛ばしてるぜ。」

「ええ、攻撃を防いでシンクロ召喚をしたと思ったらそれを破壊。どちらも負けていないわ。」

明日香達の言葉に美里は

「でも、あのモンスターは破壊するのはまずかったですね。」

美里の言葉に翔は不思議に思い

「それは、どう言う事ですか？」

「カイザー。ツイン・ドラゴンを破壊されるのは少しびっくりしたが、少しばかり焦ったな。」

「何？」

「スクラップ・ツイン・ドラゴンの効果を発動！このカードが相手によって破壊された時墓地からスクラップと名の付いたモンスターを特殊召喚する。来い、スクラップ・ゴーレム！」

魁吏の場にもう一度冷蔵庫のようなモンスターが現れた。

「なんだと!?!」

「なんだ、あのモンスター。反則くせ」

「破壊された時と言う事は、自滅しても特殊召喚出来るってことね。強力な効果ね。」

「前に見せてもらったんですが、スクラップのドラゴン族のシンクロモンスターはみんなあの能力を持っていました。」

「魁吏君、すごいです。」

「俺は、もう一度ゴーレムの効果を使い現れるスクラップ・ビースト!そして、ゴーレムのレベルの二下げてレベルスティーラを特殊召喚する。」

「何をやる気だ。さっきのモンスターは二体で出したが、わざわざレベルを下げてモンスターを特殊召喚するとは」

「今度は違うシンクロモンスターだ、レベル四となったスクラップ・ゴーレムとレベル一のレベルスティーラにレベル四のスクラップ・ビーストをチューニング!!凍てつく氷を吐きし古の龍が今解放

たれる、シンクロ召喚！！現れる、氷結界の龍 トリシューラー！！」

魁吏の前に三つの頭を氷の龍が召喚された。

「これを、召喚するためにレベルを下げたのか。」

「まあな、こいつの効果はかなり強力だぜ。」

魁吏は、笑いながらカイザーを見た。

「強力な効果とは？」

「こついう能力だ！こいつがシンクロ召喚に成功した時に相手の場、墓地、手札から一枚ずつ除外する事が出来る！」

「……なあ！！！？？？」

「何という効果だ……」

「俺は、場のセットモンスター、墓地からサイバードラゴン、手札は一枚しから無いからそれを除外する。」

「くっ！！」

「そして、ダイレクトアタック！コキユートスプレス！」

「ぐあああ！！」

カイザー LP 4000 1300

「俺は、ターンエンドだ」

魁吏 場

モンスター 氷結界の龍 トリシューラAKT2700

手札 二枚

「俺のターン、ドロ。ふっ、俺は魔法カード天よりの宝札を発動！お互いに手札が六枚になるまでドロする。」

「な！！（おいおい、ここで天よりの宝札って何だよ。しかも、アニメ版の効果だし……）」

「俺は、死者蘇生を発動しサイバードラゴンを特殊召喚し、プロト・サイバードラゴンを召喚する。このカードはフィールドに表示で存在する時名前をサイバードラゴンとして扱う事が出来る。そして、融合を発動！場のサイバードラゴンとプロト・サイバードラゴン、そして手札のサイバードラゴンを融合し現れる、サイバーエンドドラゴン！！」

「出やがったな、カイザーの代名詞モンスター！」

「ついに、出てきたわね。亮の最強のモンスター。」

「すげ〜、かつこいいモンスターだなあ！」

「お兄さん、すげい。」

三人がサイバーエンドドラゴンに驚いていたが美里だけは魁吏を見て

「あれが、カイザー最強のモンスター……魁吏さん。」

「バトルだ！！エターナル・エヴォリユーション・バースト！」

サイバーエンドから放たれたビームがトリシューラを包み込んで破壊された。

「ぐあああああ！！！！！！」

魁吏LP4000 2700

「俺は、二枚カードを伏せてターンエンドだ。」

カイザー場

モンスター サイバーエンドドラゴン AKT4000

伏せカード二枚

手札0

「くそ、戦況を一変させられた。どうする、さっきのターンで手札は六枚まで増えたが手札にサイバーエンドドラゴンを倒すカードは手札に無い……チューナーはあるがスクラップゴブリンだしな。出したら、貫通効果で負ける。とにかくドローしてから考えるか。俺のターン、ドロー。」

魁吏は考えた末にドロ―した。

「これは！―よし、これならいける。俺は魔法カード簡易融合をLP1000を支払い発動する、この効果によりレアフィッシュを特殊召喚する。」

魁吏の場に獅子と魚が融合したモンスターが現れた。

魁吏LP2700 1700

「なぜ、あのようなモンスターを1000も支払ってまで」

「理由は、これだ！―手札から、スクラップ・ゴブリンを召喚し、レベル4のレアフィッシュにレベル3のスクラップ・ゴブリンをチェーンニング！氷で作られし槍がこの世の全てを貫き砕く。シンクロ召喚、現れる氷結界の龍 グングニール！―」

魁吏の前に全体を氷で覆われ、禍々しさを持った龍が現れた。

「氷結界の龍 グングニール。さっきのトリシューラと同じ系統のモンスターか。」

「その通りだ。しかし、こいつは他の奴らと違って出しづらいんだ。」

「出しづらい、それはどう言う事だ？」

「こいつは、チューナーと水属性のモンスターでなければ召喚する事が出来ないんだ。だから、水属性であるレアフィッシュを使ったっていうわけだ。」

「なるほど。それほどの手順を踏んだんだ、能力はそれなりの効果なんだろう。」

「ああ、見せてやるぜ。俺は、グングニールの効果を発動！グングニールは一ターンに一度手札を二枚まで捨て相手フィールドのカードを破壊する事が出来る。俺は、手札を二枚捨てサイバーエンドドラゴンと伏せカードを破壊する、凍りつけ！」

「くっ！！」

「すげー、カイザーのサイバーエンドドラゴンを破壊し絶望的な戦況をさらにひっくり返した……」

「なんて力なの、氷結界の龍達は」

「あんなモンスターを变幻自在に扱えるなんてすごい。」

「お兄さんの、モンスターを悉く破壊していくなんてすごいです。魁吏君。」

「カイザーにダイレクトアタックだ！エターナル・フリーズ！」

「悪いが、それは通すわけにはいかない。リバーカードオープン、攻撃の無力化。」

グングニールが放った氷の槍はカイザーの前に現れた渦に飲み込まれ消えた。

「くっ、これでも通らないのか。俺はターンエンド。」

魁吏 場

モンスター 氷結界の龍 グングニールAKT2500

手札 三枚

「行くぞ。俺のターン、ドロー！俺は、命削りの宝札を発動し、プロト・サイバードラゴンを召喚し貪欲な壺を発動。墓地からサイバードラゴン二枚、サイバーフェニックス、サイバー・エンド・ドラゴン、サイバー・ツイン・ドラゴンの五枚をデッキに戻し二枚ドロ―する。」

「（おい、最初手札0だったのに。今じゃ手札が五枚ってなんだよ。チートにも程があるだろ！！）」

「俺は、魔法カードパワーボンドを発動！手札のサイバードラゴン二枚と場のプロト・サイバードラゴンを融合、出でよサイバー・エンド・ドラゴンー！！」

「ついに出了か、攻撃力8000のサイバー・エンド・ドラゴン・・・」

「行くぞ、魁吏。これで止めた、エターナル・エヴォリューション・バースト!!!」

サイバーエンドから放たれた三つの光線は一つになりグングニールに襲う。

「くそおおおおお!!!!!!」

魁吏 LP1700 - 6300

「おい、魁吏!!!大丈夫か!?!」

「ああ、くそおゝ負けた!!!最後の最後で巻き返された!!!」

「でも、すごいわよ。亮相手に此処まで喰いかかったのは貴方が初めてよ。」

「そうです。すごいです、何度も何度も立ち向かっていくなんて感動しました!!!」

十代達が魁吏の周りを囲んでいるとカイザーが近寄ってきた。

「如月魁吏、久々に面白いデュエルが出来た。礼を言おう。」

カイザーは手を魁吏に向け伸ばし、魁吏は手を取った。

「ああ、こつちも良い経験が出来た。ありがとう。」

カイザーは翔の方を少し見て立ち去った。

「魁吏君……」

魁吏に翔が近寄った。

「翔、その顔だと何かを掴んだみたいだな。」

「うん、逃げてるだけじゃなくて立ち向かっていく事も大切なんだって。いう事が良く分かったツス。」

「よし、ならさっそく戻って練習だ！」

「「おっ！……」」

第十一話VSカイザー（後書き）

どうだったでしょうか？カイザーのチートドロを書くのは本当に大変でした。かなり、無理やりなことをしましたが。次回については制裁デュエル編です。

第十二話 制裁デュエル 前篇 VS 十代、翔（前書き）

制裁デュエルが始まります。三つくらいに分ける予定です。では、十代&翔篇です。

第十二話 制裁デュエル 前篇VS十代、翔

「おい、それは本当なんだろうな。」

「本当デウス。私は、シンクロやエクシーズ召喚などは知りませ〜ン。」

「そうか、こっちも奴の事を調べてみたが素性が全くといって足が掴めなかった。だが、アカデミアの筆記試験にも受けられそして、実施試験ではシンクロ召喚という新たな召喚方法で見事、最高責任者を倒し入学を決めた。」

「そうですか、遊戯ボーイにも聞いてみましたが知らないと言ってます。一体、彼は一体何者何でシヨウカ？」

「それを、確認するために行くのだろうが。それに、アカデミアにあいつが向かったという情報も届いている。あいつが何故、アカデミアに行ったのかは知らんがあいつが絡むと悪い事しか起こらん。」

「そうですね。三邪神事件でイレイザーを使い消息が途絶えました。が、こんな所で見つかるとは思いませ〜ンデシタ。早く、捕まえないと大変な事になりマ〜ス。」

二つの影が乗ったヘリがアカデミアに向かった、そして二人が言っていたあいつとは誰の事なんだろうか……

デッキの改造から1週間ついに、制裁デュエルの日がやってきた。その間にも翔が逃げ出したり、カイザーとデュエルしたりと色々大変だった……その後、連れ戻し翔のデッキも改良し練習も行い

「ついに、この日が来たな。」

魁吏は二戦目なので明日香達の共に観客席で様子を見ている。

「そうね。所で、貴方は大丈夫なの？」

「ああ、デッキは仕上げてきたし。今は、十代達を応援するぜ。」

「魁吏さん、今日は一体どんなデッキを使うのですか？」

美里は、魁吏を見ながら聞いた。

「ああ、今回はシンクロが主軸のデッキだよ。」

「あら、今までのデッキもシンクロが主軸じゃなかった？」

明日香も話に加わり、魁吏に聞いた。

「今までのデッキとは違く、シンクロの召喚スピードに特化したデッキなんだ。見たら、びっくりするぜ。」

魁吏は、笑いながら明日香達を見た。

「お前は、色んなデッキを使うから対策が取りづらいな……」

三沢も、デッキの内容を聞いて少し疲れたように言った

「はははははは。お、始まるみたいだぜ。」

「では、今から制裁デュエルを始めるの〜ネ。」

デュエルの順番はタッグを行った後にシングル戦をやるので魁吏は後という事になる。

「そして、ドロップアウトボーズのタッグデュエル対戦相手は、あのデュエルキング武藤遊戯と戦ったことのある伝説のデュエリストナのーネ。」

そして、クロノスの声に反応しデュエル場に二つの影が、バク転しながら昇ってきて十代達の前に現れた。

「我ら流浪の番人。」

「迷宮兄弟。」

「お主達に恨みはないが…」

「故あり、対戦する。」

「我らを倒さねば……」

「道は開けん!!--」

「いざ、勝負……!」

「(毎回、見るたびに思うがこの二人が伝説のデュエリストとは思えないな……なぜ、この二人を選んだらうか? まあ、初代でまともなタッグはこの二人だったからかな。)」

「では、デュエルを開始するの〜ネ。両者は指定の位置で準備するの〜ネ。」

迷宮兄弟と十代達はそれぞれ、デュエル場の端まで行きデュエルデイスクを起動させた。

タッグデュエルルール

互いのプレイヤーに助言は禁止

パートナーのフィールドと墓地は自分のフィールド、墓地として扱える。

両チームのLP8000

順番は 翔 迷 十代 宮

「では、デュエル開始なの〜ネ!」

「…………デュエル……!……!」

「僕のターン、ドロ〜。僕は、ジャイロイドを守備表示で召喚し一枚カードを伏せてターンエンド。」

翔場

モンスター ジャイロイド DEF1000

伏せカード一枚

手札四枚

「私のターン、ドロ！私は、地雷蜘蛛を攻撃表示の召喚しターン
エンド！」

迷場

モンスター 地雷蜘蛛 AKT2200

手札 五枚

「俺のターン、ドロ！俺は、E-HERO スパークマンを攻撃
表示で召喚、さらに二枚カードを2枚伏せてターンエンド！」

十代場

モンスター スパークマン AKT1600

伏せカード二枚

手札 三枚

「私のターン、ドロ。私は、カイザー・シーホースを召喚し魔法
カード、生け贄人形を発動する。自分の場のモンスター1体を生贄
にする事で手札からレベル7のモンスターを特殊召喚する。私は兄
者の場の地雷蜘蛛を生贄に手札から風魔神・ヒューガを特殊召喚。」

「馬鹿な、一ターン目から攻撃力2400だと!？」

「やるわね。これほど、スムーズにモンスターを召喚するなんて。」

「十代さん達は大丈夫でしょうか、魁吏さん？」

「まあ、始まったばかりだ。大丈夫だろう。(しかし、風魔神か。懐かしい、本当に懐かしい。俺がガキの時だっただろうか?今では、滅多に見る事が出来ないカードだ……)」

魁吏は風魔神を見て少しばかり懐かしさを味わっていた。

「すまむな、兄者よ。」

「いいや、お前のためになら犠牲にでもなるう。」

「だが、それでは私の気が済まない。私は兄者を対象に魔法カード、闇の使命者を発動。このカードはカードを一枚選択しそれが、デッキに入っていれば相手は手札に加える。私は、雷魔神 サンガを選択する。」

「ふふふ、有りがたい。私のデッキには雷魔神 サンガが入っている。よって、手札に加える。」

迷は手札に雷魔神 サンガを加えた。

「私は、これでターンエンドだ。」

宮場

モンスター カイザー・シーホース AKT1700

風魔神 ヒューガ AKT2400

手札三枚

「僕のターン、ドロー！ スチームロイドを召喚する。そして、ジャイロイドを攻撃表示に変更。（どうする。どっちを攻撃するべきだ。生贄人形でフィールドが開いた兄を攻撃するべきか、それとも、次のターン出てくるだろう雷魔神サンガのためにカイザーシーホースを破壊しておくべきか……）よし！ スチームロイドでカイザーシーホースを攻撃！」

蒸気を出しながらスチームロイドは、カイザーシーホースに体当たりするが

「させん！ 風魔神ヒューガの効果を発動し攻撃を一度だけ0にする。」

ヒューガが出した風の壁によって、スチームロイドははじかれた。

「届かない……でもこれは、無効には出来ない！ ジャイロイドで兄にダイレクトアタック！」

「ぐあー！」

迷宮兄弟 LP8000 7000

「やったぜ！翔、伝説のデュエリストから先手を取ったぜ！」

「やったす、アニキ。僕は、メインフェイズ2に融合を發動しスチームロイドとジャイロイドを融合！来い、スチームジャイロイド！さらに、一枚カードを伏せてターンエンド。」

翔場

モンスター スチームジャイロイド A K T 2 2 0 0

伏せカード二枚

手札二枚

「よし、十代達が先手を取った！」

「翔君が先手を取るとは思ってなかったけど、すごいわ！」

「すごい、このまま行けば勝てる。」

「翔！このまま、押しきれ！（アニメだと初手で融合してダメージが通らなかつたが、これでいい。でも・・・次のターンにはあいつが出てくるんだろっな。元の世界でも実戦で見た事がないあのモンスターが）」

「よくもやったな。私のターン、ドロー！私は、死者蘇生で地雷蜘蛛を復活させ魔法カード生贄人形を發動する。この効果により手札から水魔神スーガを特殊召喚！弟よ、今度はお前の力を借りるぞ！」

「ああ、兄者よ。」

「私は、カイザーシーホースを生贄に雷魔神サンガを召喚！カイザーシーホースは光属性の生贄にする時一体で二体分とする事が出来る。」

そして、迷宮兄弟の場には雷魔神サンガ、風魔神ヒューガ、水魔神スーガが揃った。

「そんな、一気に上級モンスターが三体も……」

「まだ、終わりではない。私は、雷魔神サンガと風魔神ヒューガ、そして水魔神スーガを生贄に出でよ。最強のモンスター、ゲート・ガーディアン!!!」

「ゲート……」

「ガーディアン……」

「ゲート・ガーディアン……」

「そんな、攻撃力3750だなんて……」

「あんなモンスターが出てきたら十代さん達は……」

「（おいおい、ついにやがった。ゲート・ガーディアン、実戦で召喚したの初めて見たぜ。でも、ガーディアンにするよりも三体で攻撃した方がいいのになんで、こっちはやたら合体したがるんだ？）」

「私は、ゲート・ガーディアンでスチームジャイロイドを攻撃！魔神衝撃波！」

「ぐあああああ！！！！」

ゲート・ガーディアンから放たれた攻撃がスチームジャイロイドに直撃し破壊された。

十代・翔 LP 8000 6450

「私はこれで、ターンエンドだ。」

迷場

モンスター ゲート・ガーディアン AKT 3750
手札二枚

「俺のターン、ドロー！俺は、融合を発動し手札のバーストレディと場のスパークマンを融合！」

「その素材で召喚出来るHEROはいるわけが！」

「来い、炎のHERO ノヴァマスター！」

十代の場に炎を纏ったHEROが現れた。

「バ、バカな！？なぜ、その素材でそのようなHEROが呼べる！」

「へへへへへ、こいつは炎属性のモンスターとHEROと名のつくモンスターが素材で呼び出せるHEROだ！さらに、エアーマンを召喚するぜ！召喚時効果によってデッキからHEROを手札に加える、俺はE・HEROオーシャンを手札に加え融合を発動！来い、風のHERO Great Tornado！」

「ふん、たかが攻撃力2800で何ができる。」

「それはどうかな、Great Tornadoの効果発動！召喚時に相手フィールドに存在するモンスターの攻撃力、守備力を半分にする！」

「「な、何だと！？」」

「くられ、ダウンバースト！」

ゲート・ガーディアン AKT3750 1875

「バトル！ノヴァマスターで攻撃、メテオ・フレイム！」

ノヴァマスターから放たれた炎がゲート・ガーディアンを包み込み破壊した。

迷宮兄弟 LP7000 6075

「ば、バカな！こんな簡単に、私達の最強モンスター」

「ゲート・ガーディアンが破壊される等！？」

十代がゲート・ガーディアンを破壊した瞬間声援がわいた。

「おお！！すごいぞ、十代！」

「まさか、一ターンでゲート・ガーディアンを破壊するなんて・・・

「あれが、風のHERO Great Tornadoですか。なんて強力な効果なんでしょう。」

「はあく渡しておいてなんだけど属性融合モンスターと十代のチートドロローが合わさったら最強なんじゃね？普通、手札四枚でノヴァとGreat Tornadoをどっちも出すか、普通・・・」

「アニキ！」

「おう、やったぜ！俺は、ノヴァマスターの効果を発動する。こいつは相手モンスターを破壊した時デッキから一枚ドロローする。そして、Great Tornadoでダイレクトアタック！スーパーセル！」

「ぐああああ!!!」

迷宮兄弟 LP6075 3275

「俺は、ターンエンドだ!」

十代 場

モンスター E・HEROノヴァマスター AKT2600

E・HERO Great Tornado AKT

2800

手札一枚

「く、私のターン、ドロロー!ゲート・ガーディアンを倒した事は褒めてやるう。だが、ゲート・ガーディアンを破壊した事は失敗だったな。魔法カードダーク・エレメントを発動!このカードは墓地にゲート・ガーディアンが存在するときに発動でき、ライフを半分支払う事でデッキから闇の守護神・ダーク・ガーディアンを特殊召喚する!出でよ、ダーク・ガーディアン!」

フィールドに出来た穴からダーク・ガーディアンが召喚された。

迷宮兄弟 LP3275 1638

「攻撃力3800だと!?!」

「そんな、せつかくゲート・ガーディアンを倒したのに」

「バトル、ダーク・ガーディアンよ小僧にダイレクトアタック!ダークショックウェーブ!」

「翔!!」

「大丈夫っす!リバーズカードオープン、エネミーコントローラー!一つの効果によってダーク・ガーディアンを守備にするっす!」

フィールドに現れたコントローラーがダーク・ガーディアンに繋がり守備表示に変更した。

「く、私はターンエンドだ。」

宮場

モンスター ダーク・ガーディアン DEF3500
手札二枚

「僕のターン、ドロー!く、手札にあいつを倒せるカードがない。僕は、パトロイドを守備表示で召喚しターンエンド。」

翔場

モンスター パトロイド DEF1200

「私のターン、ドロー!ダーク・ガーディアンを攻撃表示変更し、バトル!ノヴァマスターを破壊しろ。ダークショックウェーブ!」

「くっ!!」

十代・翔 LP6450 5550

「私はターンエンドだ。」

迷 場

モンスター ダーク・ガーディアン AKT3700
手札三枚

「俺のターン、ドロー！俺は、手札から融合回収を発動、墓地から融合とスパークマンを手札に加え融合を発動！手札に加えた、スパークマンとフェザーマンで融合、来い光のHERO Theシャイニングを召喚しGreat Tornadoを守備変更しターンエンドだ。」

十代 場

モンスター E・HERO Great Tornado DEF
2200

E・HERO Theシャイニング DEF2100

手札0

「もはや、打つ手なしと見える。なら、さらに絶望を与えよう。私のターンドロー！手札から装備魔法カードメテオ・ストライクを発動！装備モンスターは貫通能力を与える。やれ、ダーク・ガーディアンよE・HERO Great Tornadoを攻撃、ダークシヨックウェーブ！」

ダーク・ガーディアンから放たれた攻撃の余波が十代達を襲った。

「ぐあああああ！！！！！！」

十代・翔 LP5550 4050

「ターンエンドだ。さあ、どつする。サレンダーするなら今のうちだぞ。」

「アニキ・・・」

「翔！諦めるな、まだ勝負は終わってない！」

翔は、観客席にいるカイザーを見て覚悟を決める。

「・・・うん！（お兄さん、僕は諦めない！！）僕のターン、ドロー！来た！僕は、手札から魔法カードパワーボンドを発動！手札のユーフォロイドとアニキの場のE・HERO Theシャイニングを融合、ユーフォロイド・ファイターを融合召喚！」

ユーフォロイド・ファイター A K T ????

「ばかな、攻撃力が決まっていない！？」

「ユーフォロイド・ファイターの攻撃力と守備力は素材にしたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる！素材になったのは攻撃力1200のユーフォロイドと攻撃力2600のE・HERO Theシャイニングだ、よって攻撃力は3800になる！」

ユーフォロイド・ファイター A K T 3 8 0 0

「だ、ダーク・ガーディアンと攻撃力が並んだ！？だが、ダーク・ガーディアンは戦闘では破壊されない！」

「まだまだ！パワーボンドの効果発動、このカードで融合召喚されたモンスターは攻撃力は二倍となる！」

ユーフォロイド・ファイター A K T 3 8 0 0 7 6 0 0

「攻撃力7600だと!？」

「行くよ、アニキ!!」

「おう、翔!!」

「くられ、ネオ・オブティカル・トルネード!!」

「ぐあああああああああああああ!.....!!」

「ユーフォロイド・ファイターから放たれた攻撃がダーク・ガーディアンを包み込んだ。」

「ば、バカなあゝ伝説のデュエリストが負けるなんぐて.....」

「やったぜ!翔!!」

「アニキ、僕たち勝てたんだね!!」

「ああ、俺達勝ったんだ!よっしゃ!!」

「まさか、あそこから、逆転するなんてな。」

「ええ、十代と翔君の二人の勝利ね。」

「すごかったです。」

「ああ、どうなるかと思ったぜ。(ユーフォロイド・ファイターって融合素材によって上に乗るモンスター変わるのか？面白いな。)さて、次は俺の番か。」

魁吏は静かに席から立ち上がった。

「魁吏、頑張ってこいよ。お前が居なくなったらせつかくの研究が無駄になってしまう。」

「貴方とはまたデュエルしたいから勝ちなさいよ。」

「魁吏さん、頑張ってください!!」

三沢、明日香、美里が魁吏に言い

「まかせな、俺もこんな所で負けるつもりは無い!!」

魁吏はデュエル場に降りって行った。

第十二話 制裁デュエル 前篇 VS 十代、翔（後書き）

どうだったでしょうか？やっぱり、このタッグデュエルはパワーボ
ンドで止め！！しかないと思ったのでこうしました。次回は、魁吏
がデュエルします。対戦相手はまさかの相手です。Rを見てない誰
だ？と思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8089w/>

遊戯王g x 転生者の介入録

2011年11月20日01時14分発行